

551

157



始



45p

我  
一  
五  
一  
七  
三  
三  
自  
一  
文  
四  
五  
一  
一  
一  
七  
一  
八



冲野岩之助

か

た

の

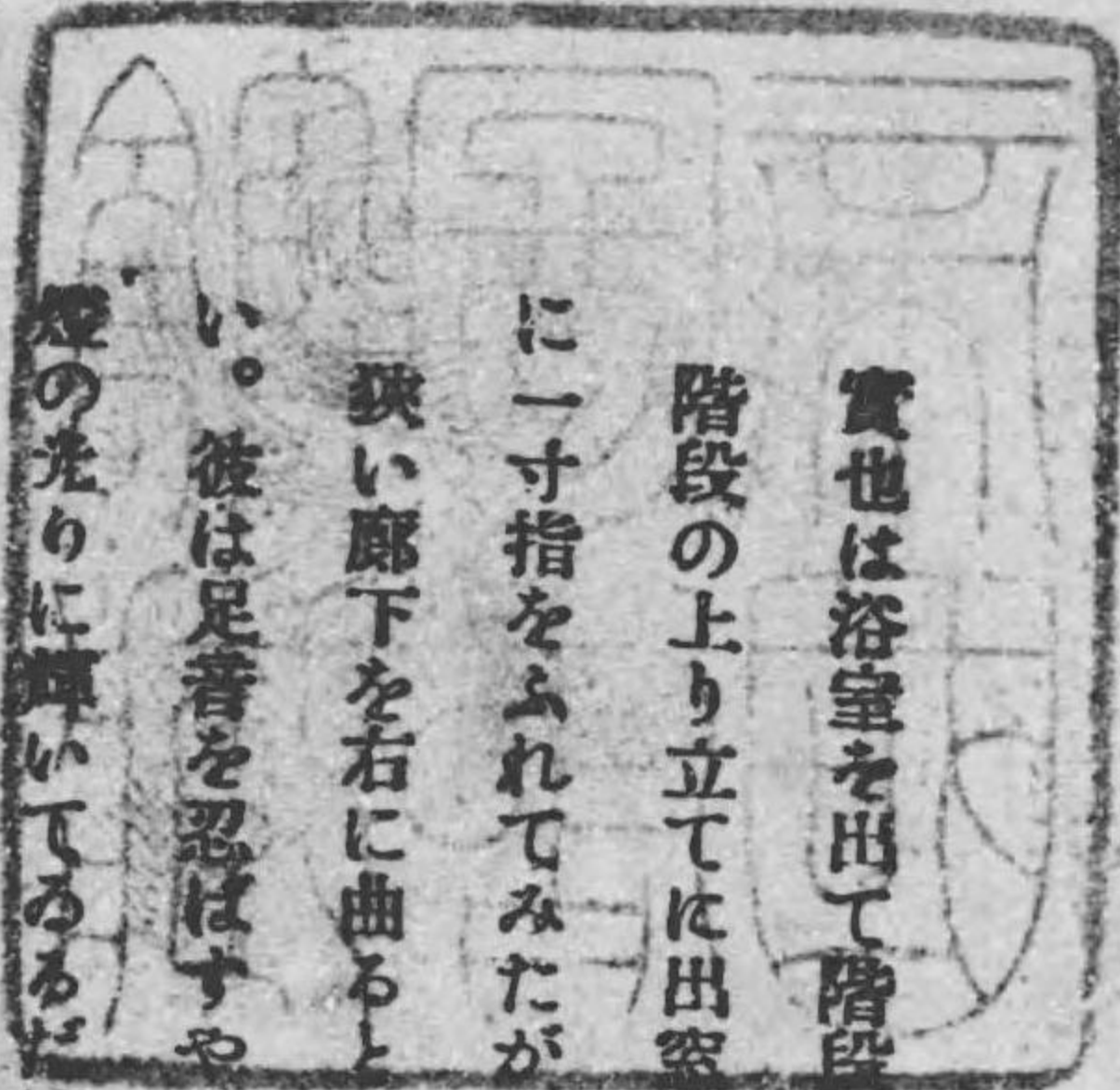
假面



大阪急号版

大正  
15. 5. 28  
内交

551-157



實也は浴室を出て階段を上つてゐる。自分の室に近寄るのが何となく恐ろしい。

階段の上り立てに出窓があつて、其所には小さいベビイオウガンが据ゑてある。彼はそのキイに一寸指をふれてみたが、オウガンは鳴らなかつた。

狭い廊下を右に曲ると奈々子の室の前は障子が閉つてゐる。ひっそりとして人の居る氣色もない。彼は足音を忍ばすやうにして、自分の室に入つてみると、其所には白いシイッが氣持よく電燈の光りに輝いてゐるだけで、室内はきちんと片づいてゐる。

彼は息を呑みながら寢床の上に横になつた。

「奈々子さん！」と呼びかけて見ようとしたが、思ひ返して黙つてゐた。隣の室からも何の言葉もない。

おはよう—きんぐ

おはよう—きんぐ

おはよう—きんぐ

多分外の室に引移つたのだらうと思つてみたが、縁側に脱ぎ揃へてあつた彼女のスリッパの色が眼のうちに浮んで来る。耳を欬てよもかの女の呼吸の響きは聞き取れない。

小さい可愛い咳拂ひの聲が聞えた時、彼は彼女の其所に寝てゐることを確めた、彼はどきん！として思はず頭をあけて襖の方を見た。

「おやすみなさいまし、お先へ失禮いたしました。」

やさしい小さい聲が聞えた。今まで堰きとめられてゐた聲が、やつと切り放たれたのである。

「おやすみなさい。」と答へた彼は、堅く眼を閉ぢながら、もう、話しかけて来なければいゝがと思つた。

息苦しい時間が、二人を囚へていぢめた。襖のこちらでは白い枕の覆ひが涙に浸されてゐる。こんな行爲をした自分を自分で蔑んでゐるのである。来なければよかつたといふ後悔が、ひしひしと胸に迫つて来る。淫靡な女だと思はれるのが口惜いのである。

一時二時の時計の音は聞いたが、實也の頭はまだ興奮にぐんぐん鳴つてゐる。枕の中に生物がゐて踊つてゐるやうである。彼は右の腕を大きく曲げて額に載せ、左の耳の上で両手の指を組合

せた。指と指とが微かに顫へてゐる。

「ばいた女！」と罵つてやりたくなると同時に、可愛い笑凹が眼に浮ぶ。

襖のこちらでは寢床がぬげがらになつてゐる。衣桁の蔭に跪いて祈るやうな恰好をしてゐる。

髪のはつれがびり／＼と動く。危く聲を立てさうな歎歎が彼女の背を小さく浪立たせる。

十年前から心の奥底で燃えるやうに思つてゐながら、今の今までそれを打あけ得なかつた自分の卑怯さに呆れるより外はない。

彼女は自分の身體が五分づゝ一寸づゝふすまの方に近よつて行くやうに思ふ。右の手が病的に痙攣しながら、赤銅の把手に觸れようとしてゐるらしい。全身が臆病に襲はれて、わらはやみのやうにふるへおのゝいてゐるのである。氣づいてみると、彼女はやつぱり寢床の中に横はつてゐる。彼女は銀線のやうな涙を兩の頬に傳はせながら天井をあふいだ時、黒い髪がばさりと、かすかな音を立て、畳の上へ落ちた。

彼女は甚だしく驚いて後を振り返つた。畳の上を這つてゐるのは蛇ではなかつた。

「實也さん！」彼女は喉の奥で衝なさうに叫んだ。

襖の彼方では、靜かな寢息が聞える。

「憎い！ 人の氣も知らないで眠つてゐる！」

彼女は怨んだ。しかしそれは本當に實也の寢息ではなかつたであらう？

夜が明けて雨戸が繰られた時、彼らは囚はれのみぢめさから逃れた。

實也が眼をさました時は、もう障子に朝日が照りつけてゐた。驚いて撥ね起きた彼が、浴室から歸つて來た時、昨夜二人の聖い節操を隔て守つた襖は廣く開け放されてあつた。奈々子は自分の室できちんと座つて新約聖書を読んでゐた。罪深い男の心を警めた聖書には、

「凡そ女を見て心を動かしたるものは、心中既に邪淫の罪を犯したるなり。」とは書いてあるが、

「男を見て……」云々とは書いてゐない。

「實也さん、お舟に乗つて湖水を渡つてみませうネ。」奈々子は馴々しく言つた。

「さうネ、行つてみませう。」

實也も容易く同意した。そして間もなく二人は俥に乗つて宿を出た。俥は湖畔の小さい灣頭に停つて、そこから舟に乗つた。船頭は五十ばかりの頑丈な男で、十一二歳の少年を助手にしてゐた。

「あなた方は、やくやくこちらへ入らしたんですか。」

船頭は櫓を押しながら言つた。二人にはやくやくの意味が解らなかつたが、二言三言問答してゐるうちに、夫れがわざわざの意味だと知れた。

「さうです。わざくこの湖水を見に來たんです。」

「あ、さうですか、これは見る價值のある湖水です。何しろ日本より古いんですから。」

「日本より古い？」と言つて實也は船頭の顔を見上げた。

「さうです。此の諏訪明神様は建御名方の神といつて、今の御朝廷の御先祖が日韓併合をなさつた時、随分反對なされたお方ですが、何しろ親御の大國主様が併合に賛成してしまつたので、致方なく此所まで落ちのびて來さつしやつたのです。」

「日韓併合は面白いネ、其の健御名方の神様が此の諏訪をお拓きになつたのですか。」

「どうして、どうして。其頃はもうこの湖水の近邊一體がアイヌ人の都だつたのです。御覽なさいその水の底に水草が見えませう。其所は會根といひまして、昔アイヌ人が遊山のためにこの湖水の中へ大きな家を建てゝあつた所ださうです。あのお宮の拜殿のやうに滅法床の高い家ですな。そいつを建てゝあつた所だつて、大學の先生は申しますよ。私も蜆鋤で、石で作つた鍬だの、石の鎗尖だのを十ばかり拾ひました。」

「さうですか、そんな石器時代のものが残つてゐますか。」

「残つてゐますとも、何さま今の御朝廷の、も一つ前のアイヌ時代から開けてゐた所ですもの。」

船頭は諏訪湖附近の古蹟について、詳しく語り乍ら櫓を押してゐると、奈々子は、

「ちよいと、あなた、あれは何でせう？」と云つて、顔色を變へて右手の方を指さした。

「鴨ですわい、鴨が二羽首を並べてゐるんですぞ。」

船頭は平氣でさう言つたが、奈々子は承知しなかつた。

「いゝえ、違ひますワ、人ぢや無くつて？ ね、船頭さん。」

「人ぢやありませんよ。この湖水で人死があつたなら、すぐ風が立つて大荒に荒れます。明神様は屍骸をお嫌ひなされるから。」

「だつて、あれは人よ。きつとさうだワ！」

奈々子は實也の袖に縋つて、ワクワクと身をふるはせてゐた。

そのうちた舟は三四十間沖の方へ出た。水面にうかんでゐるのは鴨でも人でも無く、五尺ばかりの大きな鯉であつた。白い大きな腹を上にして、人の手のやうな鰭を兩方に張つてゐたのである。

「いやだワ！」奈々子は袖を顔に掩うた。

船は程なく上諏訪の湖畔に着いた。船頭は大きなボブリアの蔭に舟を繋いで、「布半ホテルへでも行らつしやいますか。」と問うた。

「今日はこのまゝ歸らう。また出直して來ます。」

實也は奈々子に相談もしないで言ひきつてしまつた。

「さうですか、少し風が出さうだから、直ぐ引返させよう。」

船頭は子供に綱を解かせた。そして五六町も漕いだと思ふ頃、俄に東北の風が強く吹き出した。

舟が右に左に随分はげしく揺れるので、奈々子は平生の元氣にも似ず、色を変へて「恐くないワ。まあ、私、どうしませう！」と言つて、實也の腕に強く縋つてゐた。

「おうい、沖の方へ沖の方へ。さうくうんと張るんだ。」

船頭は子供を指圖しながら、元氣よく櫓を漕いでゐたが、急にその手をやめて、

「こりやア、いけねえ。三間漕いでも五間戻される。骨折損の草臥儲けだ。心中でもあつたのか知れません。まあ、船はこのまゝ流しませう。放つて置けばあの邊へ着くだらう。」と捨鉢のやうに言つた。

二人は驚いて船頭の指さす方を見た。山裾の線路に沿うて乗合自動車が走つてゐる。

「船頭さん、このまゝにしてゐても善いの？」

奈々子の兩手は確と彼の腕を捕へてゐた。激しい横波が舟縁を越して奈々子のスカートを襲つた。舟はゆらくと揺ぐ。

「大丈夫ですよ。」と船頭は故ら大きな聲で笑つたが、實也も舟が覆へるのではないかと思つた。

暫くの間四人は黙つて、遙向ふから押寄せて来る白い波頭を見詰めてゐた。

「もし此舟が覆へつて二人一緒に死んだなら？」

それは恐怖に伴ふ淡い想像ではあつたが、舟の揺れるたびに二人の心を擦過する一種の可能性を帯びた憶測でもあつた。

波はまた舟縁を高く打つた。今度は實也から手を伸ばして奈々子を抱きかゝえた。「大丈夫？大丈夫？」と咽ぶ聲を彼は自分の胸の所で聞いた。

風が凧いで、浪が大分静まつた時、實也は恥づべき事でもしてゐるかのやうに、稍手荒く自分の胸から彼女を押のけた。船頭は起ち上りながら、

「有難い、風は凧いだ。さア棹を張つた。押切らう！」と言つて、また櫓を繰りはじめた。奈々子は不安さうに彼の顔を見守つた。

舟が二町ばかりも進んだと思ふ時、船頭は何を思つたか、

「あなた方は慈雲寺へ行らつしやいやましたか。」と問うた。



「行きません。」と實也はぶつきら棒に答へた。

「旦那は旦過夕宿といふ事を御承知ですか。」

船頭の質問は餘りに突飛であつた。實也は苦笑しながら「知らないネ。」と答へた。

「旦に過ぎ、夕に宿すといふのです。あの山裾に旦過の湯といふのがありまして、その向ふに一山一寧といふ尺八のお師匠さんみたいな名前の開山様の建てた白華山慈雲寺といふお寺があります。昔は世捨人の雲水僧が、朝夙く湯の煙を見て其所を過ぎ去り、夕方遅く身體の疲れをその温泉に休めて、それからまたお寺で坐禪を組んだものです。昔も今も温泉は同じ温泉ですが、今時の人達は温泉宿を密會の場所のやうに心得てゐるんですもの……」

船頭は獨り語のやうにさう言つて勢ひよく、ぐい、ぐいと舟を進めながら、美しい聲を張りあげて歌つた。

鐘が鳴ります

岩久保さまの

踊りに來いとの

エー ヨー

知らせ鐘

ヨイサ マダヨ

諏訪の平に

葭なら二本

思ひ切るよし

エー ヨー

きらぬよし

ヨイサ マダヨ

舟が元の岸に着いた時、實也の心も奈々子の心も、或る舌難を経たあとのやうに、からりと晴れてゐた。

宿に歸つても、もう昨日のやうに恐怖とも羞恥ともつかぬ妙な感じに脅かされはしなかつた。食卓を中に平氣で茶を飲みながら、實也は觀て來た戦後のイギリスやドイツ、フランスの話をした。奈々子は彼が留守中に起つた日本の事件について語つた。それは主として女性に關する問題であつた。

番頭や女中が來て茶器を片付けたり、寢床を伸べたりしたが。二人の會話は夫れがために少しも妨げられはしなかつた。彼は彼女が朝まで自分の室にゐてもそれを拒まうとは思はなかつた。彼女はもう二つの室の區別さへ忘れて、十五六年前の幼時代を語りながら、泣いたり笑つたりした。

「あ、もう二時だネ。」

さう言つた實也は自分の言葉を悔いた。奈々子はさすがに眼を圓くして起ち上つた。そして靜かに「おやすみなさいまし。」と云つて次の室に這つて行つて、襖を閉め切つた。黒い襖の縁と縁との間隔が僅か一寸ばかりになつた時、も一度「左様なら！」と言つた彼女の紅い唇が咲盛つた芍薬の花びらのやうに見えた。

「さやうなら、おやすみなさい。」と彼が口眞似のやうに言つて起ち上つた時、次の室ではばちんと電燈のスイッチをきる音がした。

彼も何考へなくすぐ眼の前の電燈に手を伸ばしてそれを消した。眼底に残つた薄白い丸い光りが、まだ夜の霧に隔てられた人魂のやうに搖いでゐる時、たしかに自分の立つてゐる直ぐ前で、襖の開く音がきこえた。しかし彼は自分の耳を疑つた。そんなはずは無いと思つたからである。けれども彼の身體はいつとなく自分の手が冷たい襖の縁を掴む時の羞恥を想像した。

敷居が人の重みに壓せられて、かすかな音を立てたと思つた時、彼はそこに焰の如く燃えてゐる彼女の顔を感じた。しかし、彼はまだ自分の心に、自分を裏切つた絹子の姿が消え去らないのを思ひ出した、彼女もまた長い年月これだけ親密にしてゐながら、まだ唯の一度も自分を愛すると言はなかつた冷たい彼の心に手を觸れたやうに思つた。そして二人の魂は、羞恥と恐怖のために手きびしく兩方へ引離されてしまつた。

薄明かりが室内に訪れた時、二人は隔ての襖が一枚、かつきり開け放されてゐるのを見た。しかしその空虚が二人の魂の上に耻辱を與へなかつた事を彼等は誇りたいやうに思つた。

彼ははね起きて雨戸を繰つた。深潭のやうにあをくと澄み渡つた夜明の空は、悲しいやうな静寂の極致を語つてゐた。

「私ネ、今朝八時の汽車で歸りますワ。」

浴室から戻つて来た奈々子は、自分の室の片隅で髪をすきながら言つた。

「お歸りですつて？」

實也は首を伸ばして彼の後姿を覗いた。

「えエ、そんなに遊んではゐられないんですもの。」

彼女の聲は顫へて居た。彼は敷居際まで歩み寄つて、

「ではネかうしませう。自動車を備つて、上諏訪まで一緒に行きませう。」

「だつて、どうせお別かれしなければならいんですもの、こちらから乗りますワ。では、驛まで送つて下さいませネ。」

彼は打怖れてゐる彼女の態度が、何となく氣懸かりでならなかつた。

食事のあとで、身支度をしてゐるらしい彼女の室から、苛々しさに、びりりと紙を裂いてゐる音が聞えて来た。程なく出て来た彼女が、

「さ、参りませう。お待遠さまでした。」といふ言葉も何となく捨鉢のやうに聞えた。

階段を降りる時、彼は彼女の黒い髪にボンネットを縫ひつけてゐる長いピンの両端が、紫色に光つてゐるのを見た。そしてそのピンで戀人を殺した女の話又想ひ浮べた。

淋しい町の停車場にゐた人達は彼女の服装に瞳を集めた。しかし彼女は毅然として人込を押分けてプラットホームへ入つて行つた。

「お手紙を下さいネ。」

彼女は自分の靴の上に眼を落しながら言つた。

「えエ、きつと差上げます。まだ十日ばかり此處にゐますから、あなたもお手紙を下さるでせう。」

彼は心の燃えてゐるのを隠し得なかつた。

汽車が彼等の前に停つた時、一しきり雑音が起つて、人々は波のやうに揺れた。  
「左様なら！」と言つて彼は彼女の手を握つた。  
「お手紙を下さいネ。」

も一度念を押して彼女は列車の中に入つて行つた。窓の硝子は卸されたが、多勢の人目は彼等を遠く押隔てゝゐた。

汽車が動き出した時、彼女は俯向いて顔を上げなかつた。茶色のボンネットだけが見えて、可愛い忘れな草の造花が憐れに震へながら、彼の視線から遠ざかつてしまつた。

「熱くもあらず、冷くもあらず生温くして口より吐き出さるべきもの……」彼は宿へ歸る途中、俥の上で聖書の言葉を呟くやうに暗誦してみた。

歸つてみると、旅館の二階は、もう昨日の二階ではなかつた。そこは幸福を奪はれ、愛情を取られた魂の無い廢屋であつた。

二日三日経つうちに、彼は絹子の事を思ふ時、自分の魂が血みどろになり、奈々子の事を思ふ時、全身が軽く宙に浮上るやうになるのを感じた。しかし彼はまだ彼女に手紙を出さなかつた。

近いうちにまたきつとお目にかゝれるとは思ひ乍ら、やつぱり別れはつらいもの。幾度涙拭いたことか。遙お山の向ふに、ひとり残して來た人が、ひたすら戀しい。或意味で憎い、恐いと思つてもいとさが幾倍の強さで血と肉を焼く。

病人のやうにベッドの上に横はつて、やさしい音づれを待つてゐます。けれどもそれは駄目でせうか。

私にはあなたの首を皿に載せて、唇を接するだけの勇氣が無い。

書いては破り、書いては破つた末、たうとう此れだけ書いて實世に送つた奈々子は、いよく矢は弦を放れたのであるから、もう行く所まで行かなければならないと思つた。

彼女は長い間瀝へに瀝へられてゐた堰を突切つた奔流のやうに、恐ろしくも凄じ、勢ひで、實世の魂に迫つて行かうと決心した。で、もう今までのやうな常識の埒に脅かされないで、思ひつ

めた一念を果てしなく書き送つた。けれども實世は相變らず冷靜な態度を變へなかつた。

彼は彼女から四回目の手紙を受取つた時、始めて半べらの原稿用紙に僅六行の短い文句を書いて返事に代へたのであつた。

うつくしき

白百合みたる

こゝちせり

言もなく

たどうなだれて

去りしきみ

此の手紙を見た奈々子は、悲しいといふよりも寧ろ憤りを感じずにはゐられなかつた。けれども繰返し繰返し讀んでゐるうちに、實世の心の奥で、自分を愛してくれてゐることが仄に解るやうにも思はれた。言もなく、たゞ項垂れて去りし自分の心を、彼は十分に知つてゐるのだらうと思つた。自分の心が燃えたに相違ないのだと思つた。そして彼女はもう一時もちつとしてゐられ

ないやうに焦々して來た。

奈々子は直ぐ、も一度諏訪へ出かけようかと思つたが、輕薄に見られてはと自分で自分を叱つて、強いて氣を沈着けてゐた。

日盛りが過ぎて、御路樹の青葉に涼しい風が戦ぎ始めた頃、彼女は机に對つて實世にあてた長い手紙を書いてゐると、店員の一人が、

「板垣幹二さんがお見えになりました。お通し申しませうか。」と言つて來た。

「さう。では、こちらへお通し申して下さい。」

彼女は少しく眉を寄せながら言つた。あまり會ひたくなかつたのである。

「御免なさい。」入つて來た幹二はいつもの通り手を伸ばした。

「入らつしやいませ。暫くでございましたのネ。」彼女は軽く彼の手を握つた。

「坂本實也君の歡迎會の晩、お目にかゝる筈でしたが、」

「お見えになりませんでしたのネ、あなたは？」

奈々子は彼の顔色から、あるものを讀まうとした。

「是非お伺ひするつもりでしたが、あの日は僕のためにも、親しい友達が五六人集まつて、祝ひの會を開いて呉れましたので生憎でした。」

「まア、あなたの論文が通過しましたのでございますか。」奈々子は驚いたやうな表情をした。

「あの前日の官報で発表されました。しかし博士號を貰つた所で別に偉くなつたわけでもありませんから……」

「だつてお祝ひしなげりやありませんのネ。私達のグループでも。」

「しかし今時のやうに博士が濫造されちやア、祝つて貰ふ價值もありません。」

「そんな事ありませんワ。第一御計劃の新聞をお創めになるにしても、幸先さいさきが宜しいちやありませんか。」

「あの新聞計劃は、すつかり碎けてしまひましたよ。」

「どうして？」

「絹子の所爲だらうと思ふんですが……」幹二は淋しく苦笑した。

「奥様は、あなたが新聞をお創めなさるのに御反對？」

奈々子は何となく、その間の消息が解るやうに思ひながら問返した。

「絹子は僕が新聞を創める事に直接反對したわけぢやありませんが、かたがて搦手から軍資金の調達を妨げたのだらうと思ひます。」

「資金は奥様のお里から出る事になつてゐたんでせう？」

「さうでした。株式組織にしてその八分を丸山の父が引受ける約束だつたのです。所が急にそれが出なくなつたのです。勿論丸山家の言分では、商賣に失敗したからといふんですが、僕は絹子が水をさしたのだと睨んでゐるんです。」

「どうして奥様がそんな事をなすつたのでせう？」奈々子は眼を圓くして問うた。

「それについて、僕はあなたの御意見をお伺ひしたいと思つて、今日お訪ね致したのです。」

「まア、私の意見を？」奈々子は薄氣味悪く思ひながら幹二の次の言葉を待つてゐた。

「つまり絹子は僕と丸山家との關係が濃くなることを嫌ふんでせう！」

「どうして？ 丸山啓蔵さんとあなたは、義理ある親子ぢやありませんか。」

「それが親子でなくなる事を、絹子は望んでゐるんでせう？」

幹二は、これだけ言へば、もう多くを語る必要が無いといふやうに、口を堅く閉ぢて奈々子の顔をぢつと見詰めた。

「それは、あなたの邪推ぢやあ無くて？」

「いえ、邪推ばかりぢやありません。證據といふべきものがあるのです。」

「證據？」 奈々子は眼を見張りながら問うた。

「坂本君が横濱へ着いた時、絹子は坂本君に手紙をことづけました。その手紙を持つて行つた人が僕にそれを言つて呉れました。」

「お手紙を送つたつて別に差支はないぢやありませんか。絹子さんと實也さんとは昔からのお友達ですもの。」

言ひながら奈々子は、ヨハンナがその秘密を幹二に打明けた心を、忖度せずにはゐられなかつた。

「奈々子さん」と強く呼びかけた幹二は、唾を呑み込んで、一寸頭を傾けたが、「今更何にも言ふ事はないのです。みんな僕が悪かつたのです。」

「幹二さん、あなたの仰しやる事は、謎のやうで私にはちつとも解りませんワ。」

奈々子は自分の言葉が、自分を欺いてゐる事を能く知つてゐた。

では、打あけて詳しく申上げませう。あなたも多分御承知だらうと思ひますが、元々絹子は坂本君と結婚する筈だつたのです。所が坂本君と丸山の義父との間に感情の齟齬があつて、丸山の義父が急に坂本君を嫌ひ出したのです。」

「私も最初は、お二人が結婚なさるのだらうと思つてゐましたワ。」

「丸山の義父が二人を遠ざけるといふ決心をした時、もう絹子と坂本君とは互に許し合つてゐたんです、僕はそれを知つてゐました。」

「それを御承知の上で、あなたは絹子さんと御結婚なすつたの？」

奈々子は薄ら寒いやうに白い歯を見せた。

「さうです、それが僕の畢世の誤りだつたのです。つまり僕は絹子の弱點を握つて彼女を自分の

ものにしたのです。丸山の養父が、絹子を坂本君に結婚させないと断言した時、僕はプロボウズしたのです。そして親の威壓と僕の脅迫的突進とが、氣の弱い絹子を説服させてしまったのです。しかしそれは間違つてゐました。本當に間違つてゐました。」

幹二は頼み聲でさう言つて、テーブルの上に兩腕を衝いて頭を抱へた。

「しかし、絹子さんは三年も以前にあなたと御結婚なすつたんぢやありませんか、今更實也さんの懐に返らうとは思つてゐらつしやらないでせう？」

奈々子の心には嫉ましい灯が黄いろく燈された。

「絹子は坂本君の懐に歸るでせう、屹度歸るでせう！」幹二は太息を吐いてうなだれた。

「板垣さん、あなたは若し、若しですよ。若しもあなたの其直感が間違つてゐないとしたなら、どうなさいます？」

奈々子は故ら儼然たる態度を示しながら詰るやうに問うた。幹二は暫く黙つてゐたが、思ひ切つたといふ風に、

「僕はその成行きを喜びます。」と言ひ放つた。

「それは、あなた本氣で仰しやいますの？」奈々子は身動きもしないで訊き直した。

「えエ、本氣ですとも。奈々子さん、あなたは僕が大學を卒業した年の春、木梨ヨハンナさんと三人で池上の本門寺へ行つた時の事を覚えてゐらつしやいませう。」

「覚えてゐます。それがどうしたの？」

「あの時、あなたは大森から御一人で下車なすつたでせう。」

「えエ、さうでしたワ。」

「それから僕はヨハンナさんと一緒に萬世橋のミカドまで来て、其所で食事をしての歸るさ、ヨハンナさんは、あなたと坂本實也君との関係を詳しく僕に話して呉れました。」

「まア、實也さんと私との関係を？」奈々子の顔は、ほんのりと火照つた。

「坂本君が京都の高等學校に、僕と一緒に居た頃、非常に煩悶してゐた事は僕も知つてゐました。しかし、それがあなたとの関係であつたとは、ちつとも知りませんでした。僕はヨハンナさんの話を聞いた時松住町から天神町の方へ上りながら、戀愛に對する失望が、人間にどれだけの負傷を與へるものかといふ事を、始めて實驗したのでした。」



幹二の顔には悲哀の追懐が甦つて来た。

「板垣さん！」と強く幹二を制するやうにした奈々子は、冷静を粧ひながら、「えエ、私達は度々手紙の往復を致しました。けれどもそれは戀でも愛でもありませんでした。その頃實也さんは私から誘惑を感じたと仰しやいました。私だつて異性懐しい感じには懊まされました。しかしそれは人間の誰にでも経験のある若い人の心の衝動ぢやありませんか。」

「奈々子さん、僕は其時あなたの方が、本當に愛し合つてゐるのだと信じたのです。あなたも御記憶でせう。僕はあの植物園の池の傍で始めてヨハンナさんから紹介されて、あなたにお目にかゝつてから三年の間どれだけ人知れず苦しんだ事でせう。しかし僕には強敵があつたのです。あなたの事を憶ひ出すと同時に必ず坂本君の姿が現はれて、僕とあなたとの間を隔てしまふのでした。あなたと坂本君とは幼馴染であり、絶えず文通してゐられたんですから、其間に戀愛があるのだと推測するのは當然の事でした。しかしそれにも拘らず、僕の心は日一日と深く、あなたに惹きつけられて行つたのです。で、いつか、機會を見て僕の心をあなたに打明けようと思つてゐた時、あなた方が約婚の川柄だと知つて僕は本當に絶壁から突き落されたやうに思ひました。」

幹二の顔には羞恥と興奮が混亂して見えた。

奈々子は、あまりに青年らしい幹二の言葉を聞くに堪えなかつた。で、わざと話題を轉じて、「では板垣さん、あなたは、絹子さんがあなたから自由を得たいと仰しやつた場合には、どうなさる御決心でゐらつしやいます？」と問うてみた。

「僕はいさぎよく絹子に自由を與へます。絹子はまだ自分の意志を坂本君に傳へてゐるでせう。しかし坂本君は、一旦裏切られた絹子を受入れるかどうか、僕はそれを疑問にしてゐるのです。」

幹二は奈々子の答へから、あるものを得ようとした。

「そりやア坂本さんにお聞きしなけりやあ、わかりませんワヨ。私達が此所で、どうの斯うのと言つたところで致し方の無い話ぢやありませんか。ね、板垣さん、否エ幹二さんと言ひませうネ。幹二さん、」と言ひ乍ら愛嬌のある顔に深い笑面を見せて「あなたは、そんな事を仰しやらないで。絹子さんが、どんなに羽搏をなすつたつて、鶯の巢には、もう杜鵑の卵が孵さしてゐるかも知れませんか。」

「僕もさう思ひます。坂本君はもう絹子の事を忘れてゐるかも知れません。しかし絹子が僕の心

から離れてしまつたといふ事實は、どうする事も出来ません。」

「夫りやア、あなたの愛が足りないからよ。」

「しかし、奈々子さん。はつきり眼覚めたものに、すぐ熟睡しろといったところで、それは出来るものぢやアありません。」

「では幹二さん、も一度お伺ひ致しますワ。絹子さんがあなたの懐を離れておしまひになつた時、あなたは、どうなさらうと思ひなされる？」

「僕には僕の行く道がありますから。」

「どんな途？ 何所へ？」

「今、僕の眼前に……そこは僕の行くべき所です！」

言ひ終らないうちに、幹二は、つと起ち上つて奈々子の側に近寄つて行つた。と、同時に奈々子も椅子を離れて窓際に速急に身を退けた。彼女は右の手を伸ばして肩と水平にあけてゐる。その白い指尖は、柱にある呼鈴よびねから僅か二三寸の距離を保つてゐるばかりである。幹二が今一步進むならその指尖は店頭の人々を呼ぶ事が出来る。

「幹二さん、お掛け下さい。お掛け下さい。私だつて、あなたに申上げなければならぬ事がありません。」

奈々子は聲を頼はせながら言つた。けれども幹二は腰を卸さうとはしなかつた。

「僕は今一言だけ言ひたい事があります。」

「え、何です？ そこで仰しやいまし！」

「僕は断然絹子と離縁します。」

「それはあなたの御自由ぢやありませんか。私、どうとも言ふ権利がありませんワ。」

「奈々子さん、僕は今あなたに對つて救ひを求めてゐるんです。僕はどうしても絹子とわかれてしまひます。あなたは絹子のために力になつてやつて下さい。」

「私が絹子さんの力に？」

奈々子は少しく意外な感じに打たれたやうに、ベルの所まで上げてゐる右の手をおろして、黒瞳勝な眼を睜つた。

「あなたのお力で、絹子と坂本君とを結婚させてやつて下さい。さうでなかつたなら、絹子は死

んでしまいます。僕だつてどうなるか知れません。』

幹二はそれだけ言つて、ぐつたりと椅子に身體を落した。

「まア、そんな事……そりやア大問題ですワヨ。第一私が、あなたの奥様でゐらつしやる絹子さんを坂本さんに……そんな、そんな大それた事が口に出されるものですか……」

「いや、絹子はもう僕の妻ではありません。僕達はもう一週間前から別居してゐるんです。』

「まア！ それは本當？」

奈々子は驚愕に充ちた視線を彼の上に投じた。

「本當です。そして絹子は坂本君を尋ねて信州へ行きました。』

「えッ？あの信州へ？」

「奈々子の顔は見る／＼蒼ざめてしまった。』

「幹二が歸つたあとで、奈々子は湧き立つやうな胸を抑へながら、室の中をぐる／＼と歩くうち

に、邪魔になる椅子や机を踏みしんに踏毀し、たゞ飛び出してやりたいと思ふ程氣が焦々した。ストーヴの飾り棚にある花瓶の一つ一つを床の上に打ちつけてみたなら、さぞ氣が霽れるだらうなどと思つた。

テーブルに凭れて眼を閉ぢてゐると、聽泉閣の庭木が見えて來、二階座敷の欄干が夢のやうに眼底に泛ぶ。

「あ！ 實也さんと絹子さんが對ひ合つて話してゐらつしやる。』

彼女は撥ね飛ばされたやうにテーブルを離れて、室の真中に立竦んだ。涙が睫の柵を破つて兩の頬を熱く流れる。

手荒く窓を開けて外を見ると、電車はあつた／＼と行く交ふ。人々は物に逐はれたやうに喘ぎながら走る。御路樹は風に吹かれていら／＼しく白い葉裏を見せてゐる。西の空を、夕陽に照らされた真紅な雲が燃えるやうに流れて行く。

彼女はもう寸時も、ちつとしてゐることが出来なくなつた。

「私にも一度實也さんの居らつしやる所へ行かなければならない！」

彼女は叫んだ。と、同時に大きな黒い拒絶の手が彼女の口を塞いだ。

「絹子さんは本當に實也さんの所へ行らしたのか知ら？」といふ有り得べき疑問の提示に對して、彼女の心は深い暗い混亂に占領してしまはれた。けれども、かの女はこのまゝこの混亂のうづの中に一夜を過ごすことは到底出來ない。

「ヨハンナさんの所へ行つてみよう。」

さう言つた彼女は、もう寸時も居堪まらなくなつて、手早く身装ひをして室を出た。そして店員にヨハンナの所へ電話をかけさせて置いて、曲り角から二軒目のタクシーを呼んだ。

彼女は自分の乗つてゐる自動車が、往來の人々を右に左に追ひ除けながら坂を走せ降りる時、自分の取るべき行動に對して、暗示を與へられたやうに思つた。

「幹二さんの手を離れたといふ絹子さんは、もう實也さんの所に行らしたかも知れない。ヨハンナさんだつて、どんな事を企てゐるか知れたものではない。と、すれば、自分は今慕地に突進しなくてはならない。自分は自分の目的を妨げる者を、みんな追ひ除けて、専心自分の馳場を馳せ抜けるべきである。」

そんな事を思つてゐるうちに、いつしか自動車は池の端の上野俱樂部に着いた。

「木梨ヨハンナさんは、居らつしやいますでせうか。」

彼女は自動車を待たせて置いて、入口の受付にゐる五十恰好な、人の善ささうな男に訊いてみた。

男は壁の名札を調べてみて、「ゐらつしやいます。」と答へたので、彼女は運轉手の方に對つて、

「ぢやア、お歸り下さいナ。あとで電話をかけますから、こゝまで迎へに来て下さいまし。」と

言つて、二階の南側にある勝手知つたヨハンナの室の方へ昇つて行つた。

「御免なさい。ヨハンナさん。」

彼女は軽いノックと共に、さう言つて耳を欵てた。

「奈々子さん？」と應へたのは確にヨハンナの聲であつた。

「えエ、さうよ。入つても善いの？」

言葉の終らないうちに、ドアは中から開いた。ヨハンナは丁度何處かへ出かけようとしてゐたらしく、例ものけぼくしい洋装の頸飾りが電燈の火影にきらめいた。

「まあ、どちらかへお出かけ？」奈々子は一步後へ退きながら言った。

「いよのよ。いよのよ。まアお入り下さいナ。今ネ、絹子さんの所をおたづねしようかと思つてゐたの。いよつ。絹子さんの所はあとでもいよんだから……」

絹子がまだ東京にゐると聞いた奈々子の心には、押隠すことの出来ない痛ましいやうな安堵があつた。けれども強いて冷靜を装ひながら、

「絹子さんは、あの幹二さんと別居なすつたとか聞きましたが、それは本當ぢやないの？」と問うてみた。

「えエ、さうよ。だから私、これから行つてみようと思つたの。」

ヨハンナは、椅子を引寄せながら注意深く奈々子の顔を見た。

「絹子さんは別居なすつて、どちらにゐらつしやるの？」

奈々子は靜かに椅子に身體を落しながら訊いた。

「ベルトン夫人の所にゐらつしやるのよ。」

「では、ミセス・ベルトンは、絹子さんを幹二さんから預つてゐらつしやるのネ。」

「あの人がお二人を取持つたのですから、差詰めさうなさるのが當然でせう？」

「あなたは絹子さんに、いつお會ひなすつて？」

「昨日お目にかゝりました……此所へ入らしたのよ。」

ヨハンナは頻に質問の矢を放つ奈々子の態度に、稍疑惑の瞳を投げながら、ちつとその顔を見詰めてゐた。

「どうして、突然別居なんかなすつたんでせう？」

奈々子は轟く胸を抱きしめるやうにして問うた。

「新聞をお創めになる事で、意見の衝突があつたやうですワ。」

「では、感情が鎮まると、直ぐお歸りになるんでせう？」

「所がネ、絹子さんは、もう二度と板垣家の敷居を跨げないつて、強い事を仰しやるのよ。」

ヨハンナは桃色の小さいハンカチーフを、右の人さし指に捲いたり解いたりしてゐた。

「では、絹子さんは神戸の方へお歸りになるんですか。」

奈々子は遠廻りに、やつと自分の目的とする質問の要所まで辿り着いたのである。

「いゝえ、さうぢやあないの。實はネ。」と言つて、一段聲を潜めたヨハンナは、頭を傾けながら、「實也さんの所へ行らつしやるんでせう？」

「まア、實也さんの所へ？」

奈々子は幹二の言葉が、ある程度まで事實である事を知つて、ぎくりとした。

「實也さんは今諏訪に居らつしやるのよ。私ネ幹二さんから大變な使命ミッシンを帯びてゐるの。」

ヨハンナはやゝ得意の微笑を兩の頬に浮べた。

「どんな事？」

「幹二さんは私に、諏訪へ行つて實也さんに會つて欲しいつて、さう仰しやるのよ。」

「まア！」と心から驚いた奈々子は、「諏訪へどんな使命ミッシンを？」

「簡單なのよ。幹二さんは絹子さんに未練が無いから、どうぞ元々通りになつて下さい……つてそれだけの事よ。」

「だつて、一旦御結婚なすつたんですもの、實也さんだつて、さう簡單に、おいそれとは仰しやらないでせう？」

「だから、幹二さんは私に詳しく説明に行けと仰しやるのよ。」

「で、あなたは行らつしやるおつもり？」

奈々子の眼の前には、金糸銀糸の綾が縦横無盡に飛び交つた。けれどもヨハンナは極めて平明な顔付で、

「幹二さんは、さう仰しやるけれど、私は實也さんに信用が無いんですもの。だから私、あなたに行つてお貰ひつて、幹二さんにお話したんだけど……」

「私、嫌ですワ。そんな事。」

「どうして嫌と仰しやるの？」

「だつて、あの人達はまだ公然の夫婦ぢやありませんか。すつかり法律上の手続きも済み、双方の感情も鎮まつた上でなければ、第三者の吾々が嘴を容れるべき筈のものぢやありませんワ。奈々子は聲に力を入れて、説きふせるやうに言つた。

「まア、あなたはそんな事を仰しやるの？ そりやア月並だワ。あんまり月並だワ！」  
ヨハンナは嘲みを含んだ聲で、笑ひながら言つた。

「月並かも知れないけれど、やつぱり夫れが正當な順序ぢやあなくつて？」

奈々子は自分の心の奥底を探られまいとするやうに、用心深く言つた。

「だつて、あの人達の結婚は最初から間違つてゐたんですもの。」

ヨハンナはまた桃色のハンカチーフを右の人差指に捲きつけて、それを小旗のやうに小さい輪廓を描きながら振廻した。

「假令結婚の動機がどうであつても、一旦正式に結婚なすつたんですもの……」

「奈々子さん、私、それについては意見があるのよ。」と言つたヨハンナは坐様を直して、「ね、奈々子さん。あの人達の結婚は神の合せ給うたものではなくつて、ミセス・ベルトンといふ自由戀愛主義者の合せた結婚だつたのです。しかも其のベルトンの考へが、大變間違つてゐたんですもの。だからそれを解して元々通り正當の結婚にしてあげる事は正しい事ぢやあ無いでせうか。」

「だつて、あなたのお考へもやつぱり、人間の考へぢやありませんか。」

奈々子は満身の勇氣を振つたつもりで、猛烈に撥ね反した。

「しかし、あの人達の結婚は、もう破れてゐるんです。心も離ればなれになり、住居も別々にな

つてゐるんです。残る所は法律上の手続きだけでせう。それは半紙一枚に二三行の文字を書けば、それで済む事ぢやありませんか。」

ヨハンナも口調鋭く曇みかけて來た。

「しかしその半紙一枚の手続きが済まないうちは、まだ幹二さんと絹子さんは夫婦なんですよ。」奈々子は指尖で、こつ／＼とテーブルをたゞきながら、口を尖らせるやうにして言つた。

「その夫婦が本當の夫婦でないんだから、吾々お友達は、それを正當の夫婦にしてあげなまやありませんワ。絹子さんは元々實也さんと總てを許し合つた仲なんでせう。それから幹二さんだつて、その事實を知つてゐながら、意地づくで戀の泥棒をしたんだワ。だから二人が離別するのは當り前よ。ね。奈々子さん、私は斯う思ふの。吾々は過つて改むるに憚る勿れといふ言葉を、眞理だと教へられたんでせう。悔改めといふ事は學校や教會で散々聞かされた言葉ぢやアありませんか。それなのに、人間の一番大事な結婚だけは、それが、どんなに過つた結婚であらうと、不義な結婚であらうと、一旦結婚した以上、それを改めちやアいけないといふ法はないぢやないの。私は世の中にこれ程矛盾はないと思ふの。ね、さうぢやありませんか。」

ヨハンナは詰め寄せるやうにした。けれども奈々子は軽くあしらつて、

「あなたの理窟は、私によく解つてゐます。私だつて、一旦結婚した以上、どんな事があつても離別しちやならないとは申しませんワ。だけど、絹子さん達の場合は、まだ時期が早過ぎると思ひますワ。」と言つて、につこりと笑ひかけた。するとヨハンナもふきだすやうに笑つて、

「御免なさいよ、奈々子さん。私、いつもこんなに興奮しちまつて、あとで恥かしいのよ。」

と言つたが、濃い美しい眉を動かしながら、「時に奈々子さん、あなたは私の代理に諏訪へ行つて下さらない？ 私、やつぱりあなたが適任だと思ひますワ。」

ヨハンナは誠實を面に表はしてゐた。けれども奈々子は、斯うした言葉の裏には、錯雜した機關があるかも知れないと疑つた。

「實也さんのお心を伺ふだけだつたら、手紙でも善いんぢやありませんか。」

彼女は自分のした生返事なまへんじに對して、自分ながら齒痒さを感じた。

「手紙ぢやアいけないワヨ。やつぱりぶつかつてお話しなきやア。」

ヨハンナは當惑したやうに、テーブルの上に瞳を落した。

「では斯うしませう。あなたと私と、二人で一緒に参りませう。」

奈々子はさも名案でも發見したやうに軽く手を拍いた。

家へ歸つた奈々子は、戯曲の作家が登場人物の出し入を考案する時のやうに、幹二と絹子と、實也とヨハンナと、そして自分との五人を、上手へ引込ましてみたり、花道から登場さしてみたりした。さうしてゐるうちに、彼女の頭は滅茶々にこんがらがつてしまつた。實也と絹子とが仲よく語り合つてゐるかと思へば、ヨハンナが出て來て實也と手を繋ぐ。自分の後に幹二が、につこり笑つて立つてゐるかと思へば、いつの間にかヨハンナが幹二と親しげに話してゐる。

「まア、私はどうかして居る。」

彼女は強く頭を振つてベッドの傍に歩み寄つた。そして身軽くベッドに腰をかけて兩足を重ねて絨氈の上をぢツと見つめてゐると、足もとから紅や青や紫の雲が湧きあがる。眼を閉ぢてベッドの上で上半身を横へると、淺葱幕あさぎまくらの前に手を繋ぎ合つた二組の男女が通る。前のは幹二とヨハ



ンナで、後の實也と絹子とで、花道の所から、とほくとひとり歩いて来るのは自分自身の  
哀れな姿である。

彼女は撥ね起きて、室の中を二三回ぐるぐると歩き廻つた。淋しい冷たい感じが、いつしか心  
の隅々に忍び込んで、たまりなく悲しくなる。幸福といふ幸福は、みんな絹子とヨハンナに奪は  
れて、自分は唯残された悲哀だけを投げ與へられたやうに思ふ。

何所かから臺詞の言葉が聞こえて来る。

「私はヨハンナさんになぶられてゐるのかも知れない？」

「否え、さうではない。ヨハンナさんは、見かけとは違つて、随分親切なお方です。」

「では、あの幹二さんの言つた言葉は、どんな意味に取ればいゝんでせう？」

「幹二さんはあなたを愛してゐるんです。」

「えエ、さうかも知れませんが。けれども私は幹二さんを愛してはゐません。幹二さんを愛してゐるのはヨハンナさんでせう？」

「いえ、ヨハンナさんは、面白半分に引掻廻してゐるんです。」

「では、絹子さんは實也さんの所へ、本當に還つて行らつしやるんでせうか。」

「多分行らつしやるでせう？」

「實也さんは、絹子さんを受入れなさるでせうか。」

「それは解らない問題です。今の實也さんは、あなたを愛してゐるんだけど……」

「ゐるんだけど、どうと仰しやるの？」

「實也さんは、あなたを友人として愛してゐるんでせう。」

「ちやア、私はどうすれば宜いんでせう？」

「幹二さんの執着の手は強い。あなたは一日も早く自分の進むべき道をえらびなさい！」

「私の進むべき道と仰しやるのは？」

「それは、あなた御自身の外に、世界中誰一人、それを知る者はありません。」

「それでは、私、迷つてしまひますワ。」

「迷ふはずはありません。あなたのお心は、あなたが、より能く御承知のはずです。」

臺詞はそこでふつりと斷れた、彼女の前には淺蔥幕が、薄ほんやりと残る。やがてそれも消え

失せて窓掛が見え、白い壁が見え、壁に掛つてゐる油繪が見える。そして自分自身のほんやりした姿を自分の寢室の中に見出した。

「私は勇氣を出さなくてはならない。私はどんな手段を取つてもあの實也さんを自分のものになければならない。奪ふんだ。本當に實也さんの心を奪ふんだ。幹二さんは絹子さんの肉を奪つた。しかし心を奪ひ得なかつたのだ。私はきつと實也さんの心を奪つてみせる！」

奈々子は自分で自分の心にその事を宣言した。そしてまんぢりともしないで、夜の明けるのを待つてゐた。

夜は明け放れた。奈々子はカヴァーを撥ねて、寢衣のまま窓際に立つた。そしてカーテンを絞つて窓を開けると冷たい朝風がひいやりと彼女の顔を撫でる。電車のまだ通はない街路を、新聞を抱へた若い男が冴えた足音を靜寂な空氣に響かせながら走つてゐる。「牛乳」と鮮かに書いた青い車を曳いた少年が急いで通る。法被を着た労働者が腕を拱んで黙々として行く。家々の雨戸はまだ、みんな閉つてゐる。

彼女は更に新しい戯曲を観たのである。それは「生きた人生」であつた。ほがらかな朝の景色を背景にした壯嚴な舞臺の前で、彼等はみんな眞剣に働いてゐる。そして彼女自身も生來未だ嘗て一度も味はつた事の無い、涙ぐましい程の眞實さに浸されてゐるのである。

「私は誤つてゐました。私は今まであまりに人生を無思慮にすごして來ました。それは大へんいけない事でした。私の態度がもつとはつきりしてゐたなら、今更こんな事に悶える必要はなかつたのです。さうです、今日ヨハンナさんにお會ひしたなら、私は私の心をすつかり打明けて、告白させよう。そしてヨハンナさんのお心も打明けて貰ひませう。私にヨハンナさんのお心が解らないやうに、ヨハンナさんも私の心が解らないのです。さうした上で私は私の道を歩ませよう。びつたりと足を地につけて一步一步を踏みしめて、目的の地點に達するまで、私は決して他を顧みないやうにさせよう。たとひヨハンナさんが私の敵であらうと、幹二さんが私の前途を梗がうと、絹子さんが私を私の目的地から遠ざけようと、私はもう一心に自分の道を歩ませよう。」

彼女は窓框に凭れて、心の中で自分と自分に懺悔し自分自身に誓つた。そして東の空を見た時、そこには曉を破つた太陽が、闇を捨て、明るみへ突進しつゝあつた。

「さあ、今日は新しい決心をもつた私が、始めて實也さんに會ふ日です！」

奈々子の心は奔流のやうに踊つた。着物を着るにも、顔を洗ふにも、何をするにも一々新しい元氣が充ち新しい意味が意識された。かうして彼女が勇ましく家を出たのは、もう街路のやゝ騒がしくなり初めた六時過ぎであつた。

彼女は車にも乗らずに、飯田町の停車場まで歩いた。そして待合室を見廻したが、まだヨハンナの姿は見えなかつた。汽車の出る迄まだ半時間程の餘裕がある。時間表を見たり、驛の時計と自分の時計とを合せたり、靴の尖に附着した泥を拭つたりしてゐるうちに、出札口の網戸が明るくなつた。

彼女は前の時とは違つて、何の躊躇もなく、「下諏訪一枚！」と言つた時、心に言ひ知れない輕快さを感じた。

切符を受取つて改札口の所に行つて、後を振り返つてみたが。ヨハンナの姿は見えない。どうしたのだらう？　と思ひながらプラットホームから入口の所を見張つてゐるが、もう發車四五分前になつても、まだヨハンナの影も容も見えない。

發車合圖の鈴が鳴り響いたので、奈々子は列車の中に入つた。そして窓から顔を出して改札口の所を見詰めてゐるが、たうとうヨハンナの姿を見ないうちに、自分と停車場との間には白い空間が残された。夫れでもまだ後ればせに駈つけて来るヨハンナの姿だけでも見ようと思つて、窓から顔を引込めないでゐた。しかし、たうとう汽車は停車場を残して、牛込見付に隠れてしまつた。

「あれ程堅く約束してあつたのに……」と呟いた時、ふとヨハンナの居る上野倶楽部からは、新宿へ来る方が便利だといふ事を知つた。で、汽車が新宿驛の構内に入つた時、直ぐプラットホームに出て、注意の眼を見張つて乗客を見渡したが、そこにもやつぱり、ヨハンナは來てゐなかつた。

十分間の停車時間も、徒らに彼女に焦燥を與へるだけであつた。けれどもその列車が動き出した時彼女は心の中で、

「善いワ、私ひとりで善いんだワ！」と叫んだ。そして、彼女は自分の前途に、祝福の讚歌が奏でられてゐるのを意識しつゝ朝日に輝く青葉を車窓の外に眺めた。

實也の心は、やつぱり淋しかつた。彼は奈々子の歸つたあとで、終日唯ほんやりとしてゐた。

湯に浸つたり寝轉んだり、考へるともなく考へてゐると、言ひたい事も言はないで歸つて行つたらしい奈々子の事が何となく氣にかゝる。自分が日本へ歸つて來たために友人である板垣幹二の家庭から平和を奪はないやうにしたいと思ふ。けれども心の奥底では絹子に對する未練が煙のやうに、かすけく立のほつてゐるのを、自分自身に對つて白狀しなければならなかつた。

そんな時、彼は自分の心の中に、長い間培つちかはれた宗教的な古い道德が廣く坐を占めてゐるのを、はつきり意識する。そして、聲を限りに、「いけない。いけない！ 何といふ不倫な事を考へるんだ？」と叫びたくなる。

彼は遣る瀬ない思ひを懷いて悶へたり、自分で自分を持てあまして嘆息したりする。こんな時に人は酒でも飲んで酔つばらふなら、元氣になるのだらうと思ふが、さて彼には、そんな勇氣もない。

「俺は長い間何のために學問をしたのだらう。こんな事を悶へたり苦しんだりするやうな弱い自分では無い筈だ！」

そんな事を思ひながら、神社の周圍をぐるりと一周りしてやゝ清々しい氣持になつて歸つてみると、机の上にはヨハンナからの手紙が載つてゐた。彼は、何となく好奇心に驅られながら急いで其の封を切つて讀みはじめた。

實也様、

黙つてお逃げになつても、私はあなたの行先を能く知つてゐます。そちらはまだお寒いのでせうネ。もう東京は毎日八十度以上でございます。

いつ頃お歸りでございますか。御豫定がきまりましたら、一寸お知らせを願ひたく存じます。といふのは絹子さんの一件で、御相談申上げたい事がございますので……

絹子さんと幹二さんとは、たうとう破裂してしまいました。事の起りは例の新聞創刊の一件からでございますが、それはホンの表面の出來事で、實は「あなた」が原因なのでございます。絹子さんは幹二さんを捨て、ミセス・ペルトンの所に行つてゐます。絹子さんが家出をなすつた

目的は申上げるまでもありませんワネ。けれどもミセス・ベルトンは法律上の手続きが済まない  
いうちは、あなたの所へ行つてはいけないツテ絹子さんを引留めてゐらつしやるんでございま  
す。申すまでもなく幹二さんは絹子さんの家出を却て喜んでゐらつしやいます。幹二さんは絹  
子さんをあなたの懐から奪つた事を、心から悔いてゐられるのでございませう。けれどもミセス・  
ベルトンは仰しやいます。

「人間の心は複雑なものですから、理窟では、絹子さんがあなたの所に、還つて行らつしやる  
事を承認してゐらつしつても、さて愈々絹子さんがあなたの腕に抱かれる日の到来した時は、  
幹二さんのお心に、どんな不意の發作が起るかも知れない。」

私はミセス・ベルトンの仰しやる事に眞理を認めませう。だから私も絹子さんに時機を待つやう  
に申上げて置きました。やつぱり絹子さんは法律上幹二さんの奥様ですものネ。

御参考までに申上げて置きますが、幹二さんが絹子さんと別居なすつた理由は、絹子さんとい  
ふ愛の古葉が散る前に、もう新しい愛の芽が幹二さんのお心にめぐみはじめたからでございま  
す。だからこそ、義侠らしく絹子さんをあなたに還すなんて仰しやるんです。

實也さん、あなただつて、今更おいそれと絹子さんを受入れられるワケのものではありません  
ワネ。誰でしたつて、私のお友達の一人は私に申しました。泥棒に取られた着物が警察から返  
つて來たので、まあく善かつたといつて一時は喜びましたが、借その着物を着て町へ出てみ  
ますと、何となくその着物が自分のものでないやうな氣がしてならなかつたさうです。で、そ  
のお方は申しました。若しも何所かでの泥棒に出會つたなら、喜んで着物を脱いで還してあ  
けるツテ……私、その「泥棒に還してあげる」といふ言葉が大變氣に入りました。  
飛んでもない事を申上げましたのネ。御免下さいませう。

あなたの忠實なる友人　ヨハンナより

實也はそれを讀み終つた時、ヨハンナから大きな忠告でも受けたやうな氣持がした。

奈々子の手紙は、一回より一回と熱情の逆りが高まつて來る。しかし實也の心は夫れに比例し  
高まらない。

彼は三日四日と同じ事を繰返し繰返し考へてゐるうちに、いつしか絹子の事も、どうやら思ひ

切る用意が出来た。猛烈に押寄せて来る奈々子に對しても謝絶の標準が調うた。ヨハンナに對しては書信の返事を差控へる程度でいい。

「さうだ。こんな事で自分の所信を曲げてはいけない。折角研究して来たものを捨てゝはならない。論文でも纏めよう。そして大學の講義にも出よう。翻譯にも取かゝらう。人類平和のためにも出来るだけの事をしよう。」

彼はトランクの中から奈々子やヨハンナの手紙を取出して、寸々にそれを引裂いた。そして原稿紙を机の上に乗せて、グレエトビジョンの第一ページから翻譯に取かゝつた。久しぶりで書く日本の文章には、故郷の人と昔語りをするやうな興味もあつた。思想の表現法が違ふやうに、東洋人と西洋人との思想にもそれだけ根底の相違があるのだといふやうな事を、今更らしく考へてもみた。

筆はすんぐと伸びる。思想はますますはつきりする。彼は自分の心から三人の女性の影が消え去つた事を嬉しく思ひながら、午前中は論文の整理、午後は翻譯、夜分はN大學である筈の講義の稿本といふやうに順序を立てゝ日課を進める事にした。さうして五日七日を過ぎすうちに、

欠

# 欠

彼は眼を開けた。そして山の方を振向いてみると、其所はやはり信州の本曾であつた。

あの正直で活潑だつた孫四郎は、大和の十津川で水に溺れて死んだのだ。」

彼はふと子供の頃、一番親しくした遊び仲間の孫四郎の事を想ひ出して、言ふに言はれない懐しさを覺えた。と、同時に、しみんと其の幼友達の孫四郎が、ふびんでならなかつた。

「死んでしまつたのだ。孫四郎は死んでしまつたのだ。あの孫四郎は田圃の畦から鱒を見てゐた自分が、眞倒に淵に落ち込んだ時、勇敢に淵に跳り込んで僕を助けて呉れたのであつた。その孫四郎は立派な若者になつた後、大和の十津川で水に溺れて死んだのだ。」

彼は小聲で獨りごちながら、また縁側に出て流れを見詰めてゐるうちに、それからそれへと、幼友達の事が追憶された。

家が貧乏で、食ふに食へない結果、他人の家の飯櫃を盗み出したのを手始めに、たうとう泥棒が本職になつた者。父親がコソ泥をしたといふので、行方不明になつた者。専門の博奕打ばくちうになつて、監獄を家のやうにしてゐるもの。夫婦喧嘩をして村田銃で若い妻君を射殺したもの。悲しい血汐をもつてゐたよめに、その美しかつた顔が見る影もなく崩れ落ちたもの。それらはみんな彼

の幼友達であり親しい遊び仲間であり、彼が田圃の畦から淵の中に落ち込んだ時、わい／＼と大聲をあけて騒いで呉れた連中であつた。

彼は故郷を出て以來、今まで随分多くの人々を友としたが、今になつて考へてみると、五六歳から十四五歳までを共に遊び暮した幼友達程、親しい想ひ出をもつ友は得られなかつた。

盗人であらうが、破落漢であらうが、どんな病人であらうが、彼らが今自分の眼の前に現はれたなら、子供時代そのまま親しい心で彼等の手を握つてやるであらうと思つた其刹那、突如として、彼は自分の心の奥底から顔を出した一人の可愛い女の子を見た。それは云ふまでもなく奈々子の幼姿であつた。

實也は夕食後宿を出て静かな町を川上の方へ散歩した。そして『お六櫛』の由來も知り、木曾義仲の生立の地が此處であつた事も知つた。

ちぎれ／＼の雲が、高い峯を西へ西へと頻りに飛ぶのを眺めながら宿に歸つた。

「まだお早いですか、」といつて女中は寢床を伸べて呉れたが、川の瀬音が頻りに故郷の懷舊を語りかけて來るので、寝る氣にはなれなかつた。で、トランクの中から、ホフマン教授の著した

(プラトーンの國家論) を取出して讀んでゐるうちに、ハイデルベルヒで親しく教を受けた教授の篤實な顔がページの上にもらついて來た。彼は直接教授の講義を聞いてゐるやうな氣持で、ずん／＼と讀んで行くうちに、いつしか川の音も木の葉の囁きも聞えなくなつて、教授の意見が、プラトーンの思想と綾をなしてページの上を流れる。彼は自分が今、日本に歸つてゐる事も、木曾の山中に來てゐることも忘れ果て、専心ホフマン教授と一緒にプラトーンを論じてゐる。藝術的な天分と、燃ゆるやうな信仰を持たないでプラトーンを論じたつて遂にプラトーンは解せるものでないと教授は言ふ。

もう、十時を過ぎ十一時を過ぎても、彼の瞳はますますページの上に焼けつく。彼は残りのページを一寸指尖で計算する眞似をした。まだ五六ページ残つてゐると思つた時、階段を踏む人の躑音が聞えた。しかし今頃自分の所へ來る人は無いと思つたので、更に次のページに眼を移さうとした時障子の外で、

「こちらにゐらつしやいます。」

「あ、さう。ありがたう。」



といふ會話が低く聞えた。彼はその一つの聲が奈々子である事を知つた時、驚いて襖の方を振り向くと、其所にはもう、につこりと笑つた彼女の顔が見えてゐた。

書物を閉ぢないで、あつげに取られてゐた彼の眼には、今日この同じ机に凭れて幻に見た幼友達、最後に現れた女の子の顔が、そつくりそのまゝ細く開けた襖の間から見えたのであつた。

「あなたがこちらへお着きになつた頃、私は諏訪へ行つたのよ。ひどいのネ、あなたは。」  
言ひながら入つて來たのは、もう幼友達の彼女ではなかつた。

「あの近所が騒がしくなつたので、急に思ひ立つてこちらへ來たのです。」

「私ネ、ヨハンナさんと御一緒に參る筈でしたの。すつかり約束してあつただけど、お見えにならなかつたのよ。」

「さうですか、何か用事でもあつて？」

「えエ、御用が無きやお伺ひ致しませんワヨ。」

奈々子はボンネットの下から、溶けるやうな瞳で彼の顔を覗き込んだ。

「どんな急用です？」

欠

# 欠

奈々子は氷のやうな冷たい眼で彼の口元を見詰めた。

「僕は愛してもゐない絹子さんを弄んだのでした。」

「まア、弄んだと仰しやるんですか。」

「えエ、さうです。僕の性情は再び燃え初めたのです。それは最初眼覺めさせられたあなたに向つて燃えたのでした。あなたは覺えてゐらつしやるでせう。二人で高尾山へ行つての歸りに、僕はあなたの下宿へ伺つて、その夜の十二時過ぎまでも話し込んで、下宿のかみさんに注意を受けた事があります。僕はその頃内心では再びあなたに對つて頗る劣情を燃やしてゐたのでした。しかしどういふものか、いざとなると僕の表面を飾る禁慾的な道德心が、あなたを排斥したのです。僕は道德的にあなたを排斥しながら、肉ではあなたに近づかうとしてゐたのです。しかしあなたは僕に汚されるには餘りに無邪氣でした。餘りに清潔でした。だから僕はあなたを、酸っぱい葡萄だといつてけなしてゐたのです。その時僕の眼の前に現れて來た普通の小鳥である絹子さんに、容易に近づく事が出來たのでした。僕が大きな罪だといふのはその事です。僕は絹子さんに對して衷心からの愛は感じてゐなかつたに拘らず、あなたのために燃されてゐた性情を絹子さ

んに向つて充たしたのです。世にこれ程大きな罪悪はないといふ事に、僕は今頃やつと氣ついたのです。』

實也は恥かしさうに、うなだれてしまつた。

「私には、あなたの仰しやる事がわかりませんワ。つまり私を捨て、絹子さんを愛しなすつたと仰しやるんでせう？」

奈々子は強いて冷靜を装ひながら言つた。

「いえ、僕のいふ意味は、そんな事ではないのです。つまり、あなたを愛してゐながら、あなたに満足されなかつた物を絹子さんによつて充たしたのです。それが本當のアダルトライダと思ふのです。一例を取つて言ふなら、此所に道德家があります。その道德家は一夫一婦主義で、所謂品行方正な人です。所が他の一人の女を見て猛烈に性情が動く。しかし妻をもつ者は他の女に接してはいけないといふ道德で自分を縛つて、強いてその情を抑へる。しかしその女に對して燃やした性情はそのままに消えてはしまひません。そこで、やむを得ず自分の妻君に對つて發散させるのです。そんな人があつたとするなら、世にこれ程憎むべき罪悪を犯した人はないのです。」

それが本當の姦淫アダルトライダの罪なんです。僕はその大きな罪を犯したのです。』

實也は心が痛むやうに、片眼をしかめて机の上に兩手を載せた。

「それから？」

奈々子はまだ彼の言葉の全體が解せないやうな態度を示した。

「唯それだけです。つまり僕が絹子さんを愛してゐると思つたのは、實はあなたを愛してゐたのです。しかもそれは、あなたの肉だけを愛してゐたのです。そして、絹子さんを器械のやうに弄んでゐたのです。』

實也は自分で自分を極度に嘲弄したいやうな顔付をした。

「では、あなたは、私の全體を愛して下すつた事はないと仰しやるの？」

奈々子の顔には興奮の色が漲みなぎつてゐた。

「さうです。和歌山時代には本當に無邪氣に、あなたを愛しました。しかし性が眼覺めかけて以來、僕は唯あなたのその愛らしい容貌と、その豊満な肉が戀しかつたのです。だからその望みが達しられなかつた時、僕は絹子さんの肉だけを求めたのでした。つまり僕はあなたと絹子さんと

二人を同時に汚してゐたのです。」

實也はもう夫れ以上言ふ事を好まないらしかつた。

「では、今の私に對して、あなたはどう思つてゐらつしやいますの？」

奈々子は息をはづませながら、詰るやうに訊いた。

「大變濟まない事をしたと思ふだけです。」

「では、私があなを愛してゐることを告白したなら、あなたはどうなさいます？」

「僕の心に純眞な愛が湧き起つて來るまで、待つて戴くより外はありません。」

「わかりました。ようくわかりました。では、もう一つの質問をおゆるし下さいまし……では、

あなたは絹子さんをどうなさいますおつもり？」

「どうもいたしません。」

「だつて、絹子さんが此所へ、今夜にでも押しかけて來なすつたらどうなさいます？」

「僕は多分會ひますまい。若し會つたとするなら、僕はあの人に對して僕の犯した罪を謝するだけです。」

「では、幹二さんが絹子さんを許し、絹子さんがあなたの所に還つてゐらしつても、あなたはもう決して絹子さんをお近づけにならないのですか。」

「さうです、僕は諏訪にゐた三週間、其事について考へに考へ抜いたのです。そして、はつきり絹子さんを思ひ切りました。」

「では、私の事も絹子さんと同様に……」

「あなたと僕とは幼馴染です。過去の僕は過去のあなたを愛してゐます。現在の僕も過去のあなたを愛してゐます。」

「では、現在のあなたは現在の私を愛してゐては下さらないんですか。」

奈々子は必死の思ひで、これだけの事を言つたのである。その時實也は快刀を揮ふやうに、

「さうです！」と一言のもとに、きつぱりと言ひ斷つてしまつて、吻と太息を吐いた。

奈々子は鋭利な刃で眞額から斬りおろされたやうに感じた。しかし更に勇氣を振つて、

「では私のやうにヨハンナさんが入らしたなら？」と問うてみた。すると實也は何の躊躇もなく直に、

「僕は人間が必死になつて、戀だの愛だのといふのは、一種の病氣だと思つてゐます。僕はそんな病氣から逃れて、もつと大きな仕事に取かゝらねばならないので、」と言つて奈々子の方に賢しきうな瞳を向けた。

廊下に人の躑音がした。二人は思はず障子の方を振向くと、障子の外から女中の聲が聞えた。

奈々子が下座敷へ歸つて行つたのは、もう二時過ぎであつた。俯向いて「左様なら。」と言つた彼女の顔が涙に濡れてゐた事も、斯うした慥食な自分の態度を、彼女がどんなに深く悲しんでゐるかといふ事も、彼は知り過ぎる程知つてゐた。けれども彼は今までの行懸りを、すつかり投捨てなければならぬと思つた。

彼は自分の態度が斯うだといふ事が、はつきり幹二や絹子に知れるなら、彼等二人はきつと元々通りになるであらうと信じてゐた。

「さうだ、それが彼等の幸福に相違ない。學生時代から首席を争つてゐた幹二君だ。その幹二君

は戀愛においても僕に捷つたのだ。その誇りをそのまま彼に携へさせて置かう。そして僕は終生獨身で暮しても善い。僕の眼中にはもう奈々子さんもヨハンナさんも無い。彼等と僕との關係は、彼等が單なる道路の人でないといふだけの事だ！」

彼は蒲團の中で、眼を閉ぢながらそんな事を考へてゐるうちに、いつしか、うつらくと眠りに落ちて行つた。

「あなた、もし……實也さん。」といふ優しい聲が廊下から聞えたので、彼は驚いて眼を覺すと、もう室内は眞晝のやうに明るく、東の高窓から日光が、かんくんとさし込んで襖の四君子の繪が際立つて黒く見えてゐた。

「あ、もう何時ですか。」彼は兩の腕を伸ばしながら問うた。

「今丁度七時よ。」

「さうですか、あなたは大変お早いですネ。」と云ひ乍ら寢床を出た彼は、足音高く段梯子を降りて、洗面所へ行つた。

彼は顔を洗つてゐるうちに、何となく大きな事件の解決を見た後のやうな悲哀が心に渦巻いて

るのを感じた。

室へ戻つてみると、室内はきれいに片づいて、山に面した障子は廣く開け放されてあつた。奈々子は恥かしさうに欄干に凭れて川の方を見てゐた。

實也は素足のまゝ冷い縁側に出て、奈々子と並んで川向ふの山を見た。

頬白ほくしろが頻に鳴いてゐる。杜鵑が時々峯から峯へと鳴きながら飛ぶ。水音は昨日に變らず忙しく聞えて来る。

「私は、もう散歩して來ましたのよ。ずつと川上の方まで……」

奈々子はやつぱり實也の方を見るに堪へないらしく俯向きながら言つた。

「お寺へ行つて木曾義仲の墓を見て來ましたか。」

「えエ、見て來ましたワ。私、あの人を大變えらい人だと思つたのよ。今朝ネ、ふいとそんな事を思つたの。」

「彼の人のどんな點がえらいと思ひましたか。」

「あの人は死ぬ間際まで、巴御前を伴れてゐたんでせう。激しい戦争の時でも。」

「夫れが偉いといふのですか。」

「さうよ。私が義經に飽足らないのは、あの靜御前を吉野の山中に見捨てたからです。それから

新田義貞も私大好きよ。」

「勾當の内侍こうたうのうだいじを愛したからといふんですか。」

「さう。九州まで逃げた尊氏が、兵隊を集めてはる／＼京都へ上つて來るまで、あの義貞は甘い戀を楽しんでゐたんですもの。楠正成だつて年がら年中、政權にありつかうと、そんな事ばかり考へてゐたんでせう。尊氏だつて正成だつて、みんな今の政治屋さんと同じことだワ。義貞はそんな政權なんか打ちやらかして、勾當の内侍を愛したんでせう。さうすれば今に自分が没落するつて事は能うく知つてゐたんでせうけれど……やつぱりえらいんだワ、あの人。」

奈々子の聲はたしかに捨鉢であつた。實也は憐れむやうに、彼女の横顔をぢろ／＼眺めながら黙つてゐた。

川向ふの繁つた緑葉の間から、鳩程の大きさの鳥が靜かな羽音を立てながら川上の方へ飛んだ。病葉が二三枚水の上に落ちた。

「實也さん、私ネ、昨晚申上げるのを忘れた事があるの……」

奈々子は實也の方をふり向かないで、わざと流れを見おろしながら言った。

「どんな事です？」實也も水の上を見つゝ問うた。

「あなたは、過去のあなたが、過去の私を愛してゐて下さると仰しやいましたでせう？」

「えエ、申しました。」

「夫れから現在のあなたが、過去の私を愛してゐて下さるつて？」

「えエ、さうです。」

「では、私も申上げますワ。」

「どんな事を？」

「私の過去と現在とは、あなたの過去と現在とを愛します。ね、いゝでせう？」

奈々子はさう言つて、始めて實也の方を振向いたが、實也は立つたまゝ黙つて川の流れを見詰めてゐた。

「過去の私が、過去のあなたを愛したつて、夫れはつまらないロジックだワ。現在の私の胸に張

り詰めてあるよの琴線を、強く掻き鳴らして下さるお方は廣い世界中で、あなたお一人だけなんです。私の胸の琴は、あなたの指に觸れなきやあ、決して鳴らないんです。私、覚えてゐるワ。

あなたは私の琴線に手を觸れた事があつてよ。本當にあつてよ。」

奈々子は生際まで眞紅にして俯向いた。白い指尖が欄干の上でピアノをたゞくやうに動いた。

實也はやつぱり黙つてゐた。

「荒濱へ海水浴に行つた朝、西瓜畑の番人に驚かされた事を覚えてゐらつしやいませう。」

「覚えてゐます。」

「あの時、私は生れて始めて異つた世界を見たのよ。」

「……………」實也は答へなかつた。

「私はその時から、すっかりあなたに對する態度が變つてしまひましたの。私がつと大膽だつたらいゝんですけど、表ツつらだけ元氣らしくしてゐても、内心は本當に本當に卑怯なんですもの。」

奈々子はぢり／＼と實也の方へ進みよつた。

奈々子の方に向き直つた實也は、謹嚴な口調で、

「有難う。僕は誠實に感謝いたして置きます。しかし奈々子さん、やつぱり僕と幼馴染であつて下さい。若し此のまま御互の愛が続くとすれば、それはプラトニックラブです。僕は今戀だの愛だのといふやうな甘い夢から逃れようと最大の努力を拂つてゐるのです。成る程戀愛といふ事も人生の一大事かも知れませんが。しかし僕は、より大きな事件が人生に横たはつてゐる事を考へます。僕にはしなければならぬ事が澤山、眼前に横たはつてゐるのです。」

實也の言葉を皆まで聞かないで奈々子は起ち上りながら、

「さうでせうとも……先づ論文をお書きになつて博士にならなければなりませんし、それから大學のプロエツサアにもお成り遊ばすんでせう。人類のために平和を促進なさる御運動にもお盡しになるおつもりでせう。」と言つて、彼の顔をぢつと見詰めた彼女の眼には、凄じいやうな光りがあつた。

實也は針で腦天を刺されたやうに思つた。彼女の言葉と態度とが冷笑にも聞え、眞實にも見えなかつた。説明する事の出来ない一種の羞恥心が全身を這ひ渡つた。

「まア、御自由に解釋して居て下さい。兎も角僕は日本に歸つて以來、昨今までは一種の神經衰弱にかゝつてゐたのです。社會に世紀病があるやうに個人にも精神的に時代病があるのです。僕は久しぶりに懐しい日本に歸つて來た時、一種の衝動で愛だの戀だのといふやうな甘い言葉に浸りかけたのでした。しかし僕は、もうそんなものは惜氣もなくなぐり捨てました。無論學位の請求もします。大學の講座も持ちます。平和運動にも携はります。しかし僕は人生の大事である戀愛を捨て、そんな事に精進するのを格別大きな恥だとも思ひません！」

實也は漸くの事で説明するやうに言つたが、奈々子は何にも言はないで、欄干に凭れて、悲しさに堪へないやうに、俯向いてしまつた。

川向ふから可成り激しい風が吹いて來て、山裾の木々が急にざわざわと騒ぎ出した。

食事のあとで、二人は細路を川上の方へ歩いて行つた。そして橋の欄干に凭れて美しい水の流れを見てゐるうちに、いつしか二つの魂は和やかに融け合つてゐた。

「私は一所懸命に商賣をしてゐますワ。あれでもう、リオン商會の名が、随分遠くまで聞えてゐる



るのよ。九州から朝鮮北海道あたりまで、得意先をもつてゐるんですもの。」

奈々子は足もとにあつた小さい石をゴム草履の爪尖で軽く蹴つた。蹴られた小石は音も無く水に落ちて、二三尺下の方へ斜ななに流れながら沈むのが、はつきり見えた。

「それは本當に宜い事です。僕も今まで研究して來た事を一通り整理します。のみならず第一思想の整理をしまさきや……」

實也は手にもつてゐた萩の小枝を靜かに流れに投げた。

「思想の整理と仰しやるのは？」

奈々子は右手から車を曳いて來た馬の、黒い鬣たてがみを見ながら言つた。

「宗教上の考へ、人生に對する考察、政治に對する意見、そんな事はみんな、各々で何とか整理をつけなければならぬ羽目になつてゐるぢやありませんか。奈々子さん、あなたの信仰だつて、今はもう學生時代とは餘程變つてゐるんでせう？」

「えエ〜、大變違つてゐますワヨ。あの頃は丁度ラディカリストが、もう直ぐ眼の前まで革命が近づいてゐると考へるやうに、私達の祈りの力で、今にもこの地上へ天國が來るものだと思つ

てゐたんですもの。」

「僕だつてさうでした。或時はキリストがこの世へ、も一度來るのだと信じてゐました。それから自分の専門の學科だつて、やつぱりその通りで、私有財産制度を一時に撤廢して理想の社會を造らうと思つたり、全世界の軍隊を解散して平和の人類聯盟を作らうとしたり、しかもそれが、この小さい自分達の宣傳の力で、直に實行の曙光が見られるのだと思つてゐたんです。考へてみれば可笑しくもあり、また感心してやりたいやうな氣持にもなります……」

「では、あなたは、もう理想をお捨てになるのですか。」

「さア、理想と空想との區別が、この頃の僕には解らなくなつたのです。」

「では利那主義でゐらつしやるのネ、あなたは？」

「そんな主義も何にもありません。僕の考へでは理想も空想も、つまりは一つです。人類を斯うする、社會をあアするといふ考へが、人間の生活の上に直面して入込んで來たなら、もうそれは具體化した事であり、實行された事なんです。」

「むづかしい議論は私に解りませんから、もうそんなお話は止しませうネ。」

奈々子は、カルサンを穿いた若い男の後姿を眺めながら言つた。

「兎に角あなたは商買を一心におやりなさい。僕も必死になつて本當の自分を作り上げますから。」

實也の聲には昔に變らぬ親切があつた。その優しい言葉を聞いた奈々子は、自分の盆の窪が感電した時のやうに、ぢいと痺れるのを感じた。

「では、私には自分勝手に空想する自由をお許し下さいますでせう？」

「それを禁ずる権利を僕はもつていません。」

「では私、空想しながら一所懸命に商買をしますワ。何年でも何年でも……」

奈々子は橋の袂まで来て、名残を惜むやうに水の中を差覗きながら言つた。

實也は彼女が、何を空想しつゝ生きて行かうとするのであるかを能く知つて居た。

グラウンドでは青年達が必死に野球の稽古をしてゐる。テニスコートでは硬球がラケットに鳴つてゐる。女郎花、桔梗、撫子の咲亂れてゐる野中の白樺の枝では頬白が頻に鳴いてゐる。

自動車がマアケットの前に停つた時、店の前に立つてゐた一人の女が、

「まア、板垣さんぢやありませんか。」と呼びながら近づいて来た。

「あゝ、あなたは木瀬奈々子さんの……」

言ひながら幹二は自動車を出ると、女は腰を屈めて、

「今いらつしやいましたのでございますか。」と言つて、にっこり笑つた。

「えエ、今来たのですが、奈々子さんはこちらぢやありませんか。」

「多分二三日の中には、お見えになると思ひますが……」

「今、どちらにゐらつしやいます？」

「諏訪の方から廻つていらつしやるんでございませう。」

「諏訪から？」幹二は思はず強い聲を立てた。

「えエ、あちらには實也さんがゐらつやるんでございませう。」

果然！ 礫は正面から投げつけられたのである。彼は心の底から、抑へ難い憤りと嫉みを感じた。

「奈々子さんは、實也君とお二人で、こちらへ入らつしやるんでございますか。」

彼の聲には異常な焦燥が混入してゐた。

「さア、その邊の事は何とも御手紙に書いてみませんでしたか、あるひは御一緒かも知れませんか。」

女は何の怪しみをも含まない聲でさう言つて、一寸頭を傾けた。その時自動車の中から、

「お客様、ホテルへ行らつしやるんでございますか。」と呼んだので幹二はあわてゝ自動車へ戻つて行つた。女は追ひ縋りながら、

「このマアケットの裏の、あの赤瓦の家が木瀬のサンマアハウスでございますから、お話に入らしつて下さいまし。」と言つた。

幹二が首を伸して落葉松の向ふにある赤瓦の屋根を見付けようとするうちに、自動車はもうマアケットを後にして葭の生ひ茂つてゐる澤の方へ降りて行つた。

自動車は山の麓を右に左に曲つて、やがて高い山の上にある、軍艦の形ちした大きなホテルの前にとまつた。

かれはボウイに案内されて、見晴らしのいゝ一室に入つた。

「大變にぎやかですネ。こんなに毎日お客があるんですか。」幹二は上衣を脱ぎながら問うた。

「いゝえ、平日は頗るヒマでございます。今晚はダンスがございますので。」

「ダンス？ 何所からか踊手が来たのですか。」

「あの瀨死の白鳥を踊るので有名な、カルサヴ井ナ嬢が見えましたので。」

「瀨死の白鳥！」

彼はミツシヨンスタイルの卓子に、半身を凭せながら呟くやうに言つた。瀨死といふ言葉が、何となく自分を嘲笑つてゐるやうに思はれたのである。

「直ぐバスルームへ御案内いたしませう。」

ボウイの言葉に、ふと吾に返つた幹二は、

「有がたう。では風呂にでも浴つて、瀨死の境から逃れませう？」と云つて、苦笑しながら、ト

ランクを開けた。

幹二が食堂へ出た時は、まだ二三人しかテーブルに着いてゐなかつた。で、彼は唯一人黙々として食事を済まして物見塔の方へ出て行つた。眞向ふに見える淺間山のスロープは、夢のやうに長く流れてゐる。日はもう山の彼方に隠れてゐるが、燃え立つような金色の雲が葦科、八ヶ岳の頂上に輝いてゐる。山頂の噴煙が風に運ばれて、遠く妙義山の方まで帯のやうに細長く流れてゐる。裾野を包む暮色の中に、電燈の光りが星のやうにきらめく。足もとの澤の方で水鶏が頻りに戸を敲く。録のやうな月がもう東の方の山の頂に懸つてゐる。やがて眼界の及ぶ限りが薄黒いベールに覆はれてしまふ。白樺の幹のみが所々で眞つ白く輝く。

再び銅羅が鳴つた。彼は冷しい空気を存分に吸つて物見塔を降りた。そして食堂に入つてみると、もう座席の七八分は観客で埋められてゐた。で、彼は後の方の椅子に腰を卸して舞臺の方を見てゐると、脊廣を着た男が出て来て開會の挨拶をした。男はこの催しが餘り急に思ひ立つたので、プログラムの印刷をする暇が無かつた事を断つて置いて舞臺裏へ入つた。

やがて幕が開くと、ロシヤ人らしい小娘が、三角な帽子を被つて、悠暢な踊りを踊つた。

「此の次には丸山絹子女史の獨唱がございます……」

司會者の聲を聞いた彼は、撥ね飛ばされでもしたやうに驚いて首を竦めた。

「伴奏は有名なミセス・ベルトンでございます……」

彼は司會者が、自分を弄るためにそんないい加減な事を言つてゐるのではないかと思ひたかつた。しかし右手の黒幕を撥ねて出て來たのは、紛ふ方なきミセス・ベルトンであつた。續いて絹子の瀟洒とした洋服姿が現れた。

彼は射すくめられたやうに、前の人の肩の後に顔を隠して俯向いてゐると、やがてミセス・ベルトンの大きな指はピアノの鍵盤の上を走り始めた。絹子は銀鈴のやうな聲でリードを三つ續けて歌つた。一曲が終る毎に聴衆は力を限りに拍手した。

幹二は言ひ知れない感情を懐きながら、前の人の肩越しに絹子が舞臺裏に入つて行く後姿をちらと見た。と、同時に彼は、嘗て絹子の先輩である音楽家が、全く音楽に理解のない夫を二度までも棄去つた一例を想ひ出した。そして自分が今まで、唯の一度も彼女の歌に忠實な耳を傾けな

かつた事を想ひ出した。彼は絹子がもう自分の姓を捨て、丸山絹子と呼んでゐるのを憎みたいやうに思つた。

「俺はあの女を離縁したのではなくて、あの女から捨てられたのではないか知ら？」

彼は腹の中に、そんな疑問を懐きながら俯向いてゐると、また幕が開いた。しかし司會者が何を紹介したのであつたか、彼は知らなかつた。

他のピアニストが出て、椅子に腰をおろした。氣づいて見ると舞臺の右手にプログラムを書きつけた紙片が上半分だけ見える。スバニツシユダンス……と書いてあるらしい。

ピアノが響き始めると同時に黒い幕を撥ねて出て來たのは誰あらう、それは更に思ひもかけないヨハンナであつた。彼はあつけに取られて、舞臺の方を眺めてゐるうちに、ヨハンナは早くも敏捷な彼女の眼中に彼を捉へた。彼女は輕快に舞臺を巡りながら、度々彼を見た。彼はもう彼女の視線から逃れる事は出来なかつた。

踊終つた彼女は舞臺裏に駈込んだ。そして場内を揺るぎ動かすアンコールに應じて二度目に舞臺に立つた時、彼女は彼の方を見てにつこりと笑つた。彼も思はず彼女に對して微笑を酬ふた。

ヨハンナはまた身軽く踊り出した。彼はこの時生來始めて、踊の面白さを知つたのであつた。

二回目の踊が終つても、會衆はなほ彼女を舞臺から離さうとはしなかつた。

カルサヅ井ナ嬢の舞踊瀕死の白鳥が濟んだ時、幹二はそつと食堂を出て自分の室に歸つた。

彼はよもや絹子がこゝに來て居ようとは思はなかつたので、室に入つても何となく落着かなかつた。若しも自分がこゝに來てゐる事をヨハンナから聞いたなら、絹子がどんな態度を取るだらうといふ事は、彼に取つて大きな疑問であつた。

幹二はベッドに腰をかけて、いろいろ考へてみた。今夜の終列車が引返さうか。それとも朝早くこのホテルを引揚げて、何所かの宿で奈々子の來るのを待たうか……

彼の考へがまだ決定しないうちに、こつくとノックの音が聞えた。彼は暫く息を殺してドアの方を見詰めてゐるが、思ひ切つて「どなたです？」と言つた。

「私よ、いゝでせう？」それはヨハンナの聲であつた。

「あ、お入り下さい。よろしいです。」

彼はボーチに出て椅子に腰をかけてみると、ヨハンナは足音を忍ばせるやうにして入つて来た。

「まあ、びつくりしちゃつたワヨ私……」

ヨハンナは眼を圓くして彼の頭の上から、ぢつと彼を見下した。

「僕こそ驚かされましたよ。まさか、あなたがこゝにゐらつしやらうとは思ひませんでした。全體いつ入らしたんです？」

幹二は少しく椅子の位置を替えながら言つた。

「今朝一番の汽車で来ましたのよ。私ネ、實は今日奈々子さんと一緒に、諏訪の方へ行くつもりだつたのよ。」

「ええ？ 奈々子さんと御一緒に諏訪へ？」

「えエ、實也さんをお訪ねするつもりでしたの。所がネ、今朝突然ミセス・ベルトンから電話がかよつて、是非こちらへと仰しやるので、私、自動車で飯田町の停車場へ駆つけたんですけれど、もう五分程遅かつたのでお會ひ出来ませんでしたの。」

「では奈々子さんはその汽車でお出でになつたのですか。」

「えエ、確にお出でになりましたワ。」

「あなた方は、どうしてこちらへ入らしたのです？」

「ミセス・ベルトンが、絹子さんにも私にも何の御相談もなさらないで、ちやあんとこのホテルのマナーチャアと約束をなすつてゐらしたのよ。それでネ、突然でしたから大騒ぎよ。私だつてもう三十分電話が遅かつたなら、奈々子さんと諏訪の方へ行つてしまつたのでしたワ。」

ヨハンナは、椅子に掛けた両手を後に廻して、髪のほつれを直した。

「絹子は僕の此所にゐる事を知つてゐますか。」

幹二は痛い所に觸られるやうな顔をして問うた。

「いゝえ知らないのよ。ミセス・ベルトンも知らないの。知つてゐるのは、私ばかりだワ。」

「夫れで、あなた方はいつまでこゝにゐらつしやるんです？」

「三日間のお約束だつて……」

「ヨハンナさん、僕は絹子の家出一件以來、あまり頭を使ひ過ぎたので、どこかでこつそり休養

したいと思つて出て来たのです。だからミセス・ベルトンにも、絹子にも僕の事は秘密にして置いて下さい。僕は明日の朝はやく、こゝを引あげますから。」

幹二は頭を掻きながら眉を寄せた。

「えエ〜私は黙つてゐますとも……だけど奈々子さんは、もうこちらへ参りませんワヨ。」

ヨハンナはさう言つて皮肉な微笑を見せた。

幹二は眞甲から、すばり！と斬りさけられてしまつたのである。

「別に僕は奈々子さんに會はなければならぬ用事は無いんですから。」

一二分間沈黙してゐたあとで、幹二はさう云つて、わざと冷靜を装ひながら硝子越に窓の外を眺めた。

「板垣さん、そんな事を仰しやらないで、正直に物を仰しやいませヨ。私、いくらお隠しになつたつて、よく知つてゐますワ。あなたは昨日私と別れて直ぐ奈々子さんをお訪ねになつたんでせう。さうでせう。それから今日またお訪ねになつたのネ。私にはよく解つてゐますワ。けどネ、板垣さん、それは無駄よ。奈々子さんはもう近いうちに實也さんと御結婚なさるワヨ。」

ヨハンナは説明するやうな口調で言つた。

「それはあなたの推測なんでせう。」

幹二は恐ろしいやうな態度で訊いた。

「無論私の想像ですワ。けれどもそれは間違ひの無い想像よ。お考へになつても、すぐ解る話ぢやありませんか。幼友達である上に、相思の仲なんでせう。外國に居らつしやるうちにも必ず毎月一二回づゝ通信なすつてゐらつしやいましたのよ。それからネ、あなたが絹子さんと御結婚なすつた時、奈々子さんはそのプログラムまで封入して坂本さんにお知らせになりましたワヨ。その時のお手紙は私にもお見せになりましたのよ。それからといふものは、奈々子さんはもう、ミセス・サカモトのおつもりでゐらしたのよ。坂本さんが御歸朝なすつた時、横濱ホテルで……それは私の推量に過ぎないんですけれど……長い間奈々子さんと御同棲なすつてゐらしたんぢやありませんでせうか……」と云つて、極めて暫くの間深い沈黙を守つてゐるが、「だつて、それは別に答むべき事ぢやアありませんワネ。」

テーブルに兩腕を衝いて俯向き込んでしまつた幹二の顔は、だんく〜蒼ざめて来た。

「板垣さん、私は決して悪い事は申しません。お止しなさいまし……奈々子さんの後を追ひ廻すなんて……奈々子さんは、もう完全に坂本さんのものですから。」

ヨハンナは胸をテーブルに押しつけるやうにして、顔を幹二の方に近づけた。

「完全に實也君のものだつて、それがどうして解りますか？」幹二は詰るやうに言つた。

「私ネ、今日此所から諏訪の聴泉閣へ電報を打つたの。するとネ、こんな御返事が参つたのよ。」

ヨハンナはポケットから一通の送達紙を取り出してテーブルの上に措いた。それには、「サカモトシ キセサマ キツフクシマヘタツ」と書いてあつた。

幹二は太息を吐き乍ら、どんよりとした眼でその黒い文字を眺めてゐた。

「絹子は今、どんな事を考へてゐるでせう？」

鈴のやうな重苦しい沈黙を破つた幹二は、氣を取直したやうに言つた。

「絹子さんは堅く決心してゐらつしやいますワ。」

ヨハンナはテーブルの上にあつた硝子の灰皿を、白い指尖でいぢりながら言つた。

「どんな決心を？」

「ミセス・ベルトンと御一緒に獨逸へいらつしやるんでせう？」

「ドイツへ？」

「えエ、ミセス・ベルトンはもういよく日本をお引揚げになるのよ。來年の一月頃。」

「絹子はミセス・ベルトンと一緒にドイツへ行くと言つてゐますか。」

「今日の新聞に、絹子さんのお話が出てゐるぢやありませんか。」

「新聞に？」

「まア、あの肖像入りの大きな記事を御読みにならなかつたの？」

「読みませんでした。」とだけ言つた彼は、今朝から奈々子の事の外、何にも考へないで、新聞すら読んでゐなかつたのを彼女に觀破された事を口惜しくも恥かしくも思つた。

「音楽に御理解の無いあなたの束縛から脱れなすつて、海外で自由に好きな道にいそしみなさんだつて。」

「ふん、そんな事を書いてゐましたか。絹子の談話で……」



「えエ、さうよ。随分露骨な事まで書いてみましたワヨ。」  
「露骨なこと？」

「あなたがお創めにならうとしなすつた新聞へ、絹子さんのお里から二十萬圓程出資なさるはずでしたのを、すつかり絹子さんの洋行費にお當てなさるんだつて……」

「ふん、彼の女はそんな事まで饒舌つたのですか、新聞記者に……」

幹二は拳を固めてテーブルを強く揺ぶつた。

「いぢやないの、もう縁もゆかりも無い閨<sup>か</sup>の他人ぢやありませんか。あなたも男です。黙つて絹子さんに總ての自由を與へておあげなさいまし。」

ヨハンナは右の腕をテーブルの上に伸ばして、彼の手を執らんばかりにした。

「無論僕はもう彼女と関係はありません。」

「では、では、板垣さん、私は今晚ミセス・ベルトンと、絹子さんとをこゝへ連れて参りますから、あのお二人の前で、はつきり離別の言葉をお陳べになつてはどう？」

ヨハンナは自分の案出した名案を、すぐにも實行させたいやうに彼の決心を促した。

「いえ、僕は會ひますまい。もう今更會ふ必要はありません。元々僕が出て行けといつたのでは無いんですから。」

「では、もうあなたは絹子さんにお會ひにならないおつもり？」

「會ひません！」

「夫れぢやア私からあなたが此所にゐらつしやる事を、絹子さんにもミセス・ベルトンにも、お話ししないで置きませうネ。」

ヨハンナは念を押すやうに言つて、俯向いてゐたが、思ひ出したやうに口の中で何事か呟きながら室を出て行つた。

翌る朝夙く起きた幹二は、會計を済まして直ぐ、こつそりとホテルを去つた。そして火山灰の白い路を溪間の方へ降りてゐると、美しくをみなへしの咲揃つた野原の細路を、こちらへ歩いて来る二人の女があつた。丁度そこは道が裕に彎曲してゐたので、彼は自分の姿を彼女等に見られないやうに、急いで身を隠した。二人は彼の來た事を知らないらしい。

彼は薄の穂蔭を急いで歩いた。そして大きな白樺の葉かけまで来て、振返つてみると前に歩いてゐるのは絹子で、後に續くのはヨハンナであつた。

二人は小聲で何だか話しながら野原の細路から大道の方へ出た。そして腕と腕とを拱みながらホテルの方へ登つて行つた。涼しい朝風が二つのスカートを吹いて桃色と水色とが色彩よく纏れ合ふ。幹二は彼女等の姿が見えなくなつた時、急いで大通りをマアケットの方へ走つた。そして前の日聞き覺てゐた奈々子の別荘へ行つてみると、まだ雨戸が閉つてゐる。何だか白い紙片が貼られてあるので、近寄つてみると「郵便物は東京本郷湯島天神町一木瀬方へ御廻送をねがひます。留守番」と書いてあつた。

マアケットへ行つて訊いてみると、表にゐた番頭らしい若い男は、

「あ、木瀬さんですか。あのお方は今年はまだもう入らつしやらないんださうです。お留守居の方も、昨日までお待ちしてゐらつしやいましたが、電報がまるつたとかで、昨晚十一時の汽車で、急にお立ちになりました。」と言つて、自轉車に乗つて輕快に坂を降つて行つた。

彼は自分を置き去りにした番頭を怨めしうに見送つてゐたが、急に思ひ直して、自轉車のわ

だちを追ひながらとほくと歩き出した。

黄色いをみなへしと、名の知れない真白い花とが一面に野を蔽うてゐる中から、紫の色濃い桔梗が、所々に可愛い姿を見せてゐる松籬草や、吾木香が朝風に揺れてゐる。けれども彼の目にはこの秋草の美しさを美しいとも思はれなかつた。唯何となく嫉ましいやうな淋しさが全身に這ひ渡る。足摺をしたいやうな悔しさが心の中を隅から隅まで渦まき漂ふ。

平原の所まで降つて来た彼は、も一度後を振返つてみた。自分が昨夜種んな幻象を描いたグリンホテルは、遙か山の頂上に白い壁を輝かしてゐる、左の方を見ると淺間の山から黒い煙が、もくくと美しく立騰つてゐる。

彼はホテルの壁に一つの窓を見た。それは半時間前まで自分のゐた室の窓である。

「僕はあの窓の中で、無言のうちにも絹子に永久のわかれを告げたのだ！」

彼はそれが今となつては取返しつかない悔ゆべき事のやうにも思はれた。けれどもすぐ思ひ直した。

「あの女は自分の所へ来て以來、本當に自分を愛した事はなかつた。彼女が時々ヒステリー患者

のやうに僕に抱きつき纏れかゝり、所嫌はずキスを投げかけて來たのは、其時彼女の心に實也君の幻影が浮んで來た結果に外ならないのだ。だから、これでいゝんだ、こんな結果に及ぶのが當然なんだ。われ／＼は今まで間違つた結婚生活をしてゐたんだ。」

彼はそんな事を思ひ乍ら、刈萱の穂の淋しく揺れてゐる廣原を通り抜けて、ステッキを振廻しながら停車場の方へ急いだ。そして、溪の流れに沿って製板所の鋸の音が齒痒く聞ゆる所まで來た時、後から疾驅して來た自動車は、彼の右側を二三間行過ぎして、そこで急に停つた。

「まア、板垣さん、もうお歸り？」 言ひながら自動車を出て來たのはヨハンナであつた。

「えエ」とだけ言つた幹二は、その自動車の中に、絹子とミセス・ベルトンの居る事を想像しながら立停つてゐると、ヨハンナは二三歩後へ戻つて、運轉手に一言二言話したので、自動車はそのまゝ驛の方に行つてしまつた。

「あなた、お一人で？」 幹二は彼女の顔を覗きながら言つた。

「えエ、私は昨晚だけのお約束でしたの……ミセス・ベルトンと丸山さんは、今晚もお歌ひなさるお約束ですの。」

ヨハンナはことさら丸山といふ絹子の本性を呼んで、につこり笑つた。けれども幹二は話頭を轉じて「ヨハンナさん、あなたはこれから直ぐ東京へお歸りなさるんですか。」

「えエ、」 「あなたは？」 彼は答へと同時に意味強い質問をした。

「僕は磯部温泉へでも行つて、暫く静養しようかと思つてゐるのです。」

「さう、では磯部まで御一緒にたしませう。」

彼女は靴の尖で火山灰を蹴るやうにして歩いた。幹二は昨夜ホテルで見た美しい踊姿のヨハンナを追想しながら、俯向いたまゝ彼女と並んで歩いた。

「あなたは昨晚ミセス・ベルトンの獨唱をお聞きになつて？」

落葉松の林に入つた時、彼女は右の手にもつてゐたバッグで、大きな半圓形を空に描きながら言つた。

「えエ、聞きました。」

「ミス・マルヤマの獨唱は？」

彼女はまたことさら絹子の本姓を呼びながら、彼の顔を意味ありげに見た。

「聞きました。お上手でいらつしやるのネ。」  
「さア。」

「批判には感情は禁物よ。良いものは良いと仰しやらなければいけないワ。」

ヨハンナは振向いて彼の横顔を見た。

「僕には聲樂が解らないんですから……夫れを批評する程でしたなら、こんな始末にはならなかつたらうぢやありませんか。」

「それもさうネ。では、あなたは舞踊にも興味をおもちにならないんですか。」

「昨晚始めて、あなたの踊を見て面白いと思ひました。」

「まア、随分あなたも人喜ばせを仰しやるのネ？」

ヨハンナはまだ手にしてゐるバッグを半圓形に振つた。

「僕は今まで藝術方面には一切興味を感じませんでした。しかし昨晚始めて、あなたの舞踊から、今まで感じなかつたある美しさ優しさを感じました。それは決して嘘でも偽りでもありません。」

「まアいゝワ。嘘でも何でもいゝワ。私の踊を見て、そんなに仰しやつて下さるお方が、日本中に唯ひとりあるんだから……」

ヨハンナは腰を屈めて、さも可笑しくてたまらないやうに笑つた。そして路傍のおみなへしはなまはの小さい枝を一つちぎつて、眼の前でくるく廻しながら、生はなまは際まで真紅にしてゐた。

「ヨハンナさん。」と重苦しい聲で呼びかけた幹二は、一寸立停つて「お願ひですから、絹子の事に關しては、當分何にも仰しやらないでゐて下さい。」

「えエ畏まりました。何とかに火のつく恐れがありますからネ。」

ヨハンナは調しら戯あそふやうに言つて、また白い靴の尖で火山灰を蹴るやうにして歩き出した。

汽車が磯部着に着いた時、ヨハンナも急に立上つて、

「私も此所で一緒に降りますワ、私、妙義山へ登つてみたいんですから……」

「あゝさうですか。それもいゝですネ。」

幹二はブラットホームの白い砂利を踏みながら言つた。

「あなたも行らつしやいませんか、これから直ぐ。」

ヨハンナは彼の傍に寄り添つて、バッグを左の手に持替へた。僕は行くにしても、今日は御免です。随分疲れてゐるんですから。」

「さう？ では今晚どちらへ？」

「どの宿がいゝか、僕にはちつとも解らないんです。」

「では私、御案内致しますワ。」

彼女は幹二を追ひ抜いて一歩先に改札所を出た。そして驛前に立つてゐる一人の案内人と呼んで、二挺の俵を命じた。

突差の出来事に、彼は彼女の所置に異論を挟む餘地がなかつた。で彼は彼女の願使のまに／＼俵に乗つてしまつたのである。

二挺の俵は櫻並木の通りを左へ折れて、碓氷川の湍たぎらの流れに逆らつて走つた。そして大きな旅館の玄関先に揖棒をおろした時、もう其所には一人の女中が彼等の來るのを待つてゐた。

ヨハンナは先に立つて式臺に上り、女中の案内する方へ／＼歩きながら時々スリッパを履

欠

# 欠

いのが長所であると思ふ。

「ヨハンナさんだつたら、諏訪へ行つた時、實也さんを捕虜にするか、さなくば全く突き放されてしまふかしてゐる。」

彼女はそんな事を思ふと、自分の煮え切らなかつた態度を肯定する事も出来る。けれども二度目に木曾へ行つた時は、前よりも、より強い態度に出てるながら、やつぱり空しく歸つて来た自分を憐れませぬはゐらなかつた。

「もう私は十九や廿ぢやあ無いんだ！」

彼女は拳を固めて自分と自分の膝を、力を極めてたゞいてみる。そして全身の燃え擴がつて行く熱情を、どうすることも出来ないで悶え苦しむ。

「何故、私はこんなに子供らしいのだらう？」

切り離れた堰を溢れ出る奔流のやうな勢ひで、諏訪まで實也の後を追うて行つた自分が、彼と別れる時、「お手紙を下さいネ。」と唯一言言ひ得ただけであつた自分の行爲を考へると、いぢらしくもあり、また可愛くもある。

今度こそはと思つて、木曾福島まで行つた時の彼女の心は、枯野を焼く猛火のやうな情熱に燃やされてゐた。しかし、二人が橋の欄干から木曾川の美しい流れを見下してゐた時、空想しながら一生懸命に商賣をします……」云々と言つたその言葉の上に、なぜ「屹度々あなたと結婚する日の来るのを」といふ一語を言ひ添へなかつたのだらうと後悔する。「若しあなたと結婚出来ないなら、私はこゝから身を投げて死ぬ！」となぜ言ひ得なかつたのであらうと、地橋踏んでも今更追付かない。

昨日も今日も彼女は手紙を書いた。レターペーパーに對つてペンを取上げた時、實也の心を焼いて焼き盡さうと思ふ。けれども書いては破り、書いては破りしてゐるうちに、いつしか平凡な手紙になつてしまふ。

「も一度行つて来よう！」

一日に何度心の中でさう叫ぶか知れない。けれどもいざとなると、彼女の理性は、淺ましい自分の姿を、自分とはつきり見出す。そして慎ましやかな態度の自分を要求する心が勝利を占める。

「私はそんな淫らな女ぢやあ無い！」

彼女は俄かに嚴肅な心に立返つて、實也が木曾福島で、「戀だの愛だのといふのは、一種の病氣です。」といつた言葉を想ひ出す。けれども彼女は全身を猛火で包み焼かれるやうに思ふ。無数の小さい針で刺されるやうないらくしさを感ずる。

奈々子は今日も實也に宛て、書いた自分の手紙を、感激に浸されながら讀み返してみた。そして眼頭に一杯涙をにじませながらそれを封じた。封筒に坂本實也様と書いた時、彼女の眼底には實也の姿が、まざく／＼と見えて來た。

「此の手紙はもう私のものぢやあ無いのよ。ね、實也さん。これはあなたのものよ。私は私の心を今日すつかり此手紙に封じて置きましたから……」

奈々子は自分の書いた手紙に切手を貼りながら、そんな事を言つた。そして其の手紙を懐深く抱きしめながら家を出た。彼女の心には、「今度こそ！」といふ一種の呻吟があつた。

曲り角のポストにそれを投げ入れた時、彼女は自分の手紙がポストの底に、ばさりと音を立てて落ちたのを知つた。

ポストの中には何十何百の葉書や封書があるに相違ない。悲しい知らせ、怨み言、堪へ切れな  
い憤怒、ふざけた話、金の督促、哀れを乞ふ泣言、求職、叱責、人様々の心を封じた手紙。其最  
後にばさりと落ち込んだ自分の手紙が、何も知らない集配人の手で、無造作にあの大きな鞆の中  
に捻ぢ込まれるのかと思へば、なさけないやうにも思はれる。けれどもそれが實也の手に渡つ  
て、しみぐと一字一句を残さず讀まれたとしたなら、しかもそれが二度三度繰返して讀まれた  
としたなら……

さう思ふと彼女の眼底には、早速に荷物を纏めて、彼女の居る東京に飛んで歸つて來る實也の  
姿がまざくと見える。

彼女は兩袖で確と胸を抑へながら、小刻みに家の方へ歩いた。抑へてゐる袖の下では心臓が潮  
のやうに高鳴る。

歸つた彼女が直ぐ一風呂浴びて書齋に行つてみると、昨日の朝輕井澤にゐる友達から送つてく  
れた邯鄲かんたんが、小さい羽を擴げて可愛い聲を立てゝ鳴いてゐる。

「戀を歌つてゐるのだ。もうやがて死ぬべき運命に置かれてゐるお前は、必死になつて戀しい友  
を呼んでゐるのだ。歌へ歌へ、死ぬまで歌ふがいよ。お前は死んでもお前の歌つた戀の唄は、私  
の心にいつまでも、いつまでも残つてゐる！」

彼女は涙ぐんだ眼を蟲籠むしろうに近づけて、ちつと邯鄲かんたんの振動かしてゐる白い薄い絹のやうな羽を見  
詰めてゐた。その時ふと彼は一月程前に訪問した友達の家で見た、金欄表紙の畫帖の事を想ひ出  
した。

その畫帖にはピアズレー派の畫を描く畫家が、珍しくも見返り柳の繪を描いてあつた。圓い線  
を描いた柳の枝が言ひ知れぬ柔か味を表はしてゐた。編笠をかぶつた武士の羽織の短いのも氣に  
入つた。枝のある曲りくねつた街燈の柱も面白いと思つた。誰がした讚か知れないが、細い美し  
い文字で、

おほる夜の如き戀かも吾が心ほのかに君を戀しと思ふ

と書いてあつた。その次には土藏倉の中から外を覗いてゐるお染の繪があつた。同じ畫家の筆で  
ある。少しく前のよりも拙い字で、

火と燃えてお染の心火と燃えて久松戀し火と燃えて戀し



と書いてあつた。

奈々子はその二つの畫と讃とが自分が畫帖を見た時の心と、今の自分の心とを、はつきり區別して説明されるものだと思つた。

「朧夜の如き戀を上品だと思つてゐた私は間違つてゐたのだ。やつぱり戀はお染のやうにお七のやうに猛烈でなければならぬ。」

さう思つた奈々子は木曾で、實也と戀を論じた時、なぜもつと突進的に彼の心を割り取らなかつたらうと悔い悲しんだ。

奈々子は今か今かと、實也からの返事を待つた。

彼女は一字一句の間違ひなしに暗誦し得る程、魂を打込んで書いた自分の手紙が、どれだけ實也の心を動かしたかを想像すると、もう浮き立つやうに嬉しかった。

ふうわりと空に泛いてゐる幻を抱きしめて虚空にキスをしてみる。そして、「盗んだキスぢや

あ無いワ。ね、さうでせう！」と甘へた口調で言つて、兩の手を交互に胸の所で拱んで、軽く左右の肩尖を打ちながら、「やつと私、本當の事が言へたの……」

彼女は椅子に身體を落して、太息を吐く。しかし、一二分もぢつとしては居ないで、またしても郵便受を差覗く。

「あら！」

彼女は眼を睜りながら、急いで箱の中に差入れた手を引出した。指尖に掴んでゐるのは、自分が全生全靈を打込んで書いた最後の手紙……それが悲しくも、「受取人今朝出發、宿所不明につき差出し人へ御返送を乞ふ。」といふ符箋付で戻つて來たのであつた。

色を蒼くして自分の室へ駈け込んだ奈々子は、地球の外へ投げ出された人のやうに、テーブルに上半身を投げかけてゐると、印度さらさの眞紅な模様が段々と涙で濡れて行く。

「何といふ不幸だらう……」といふより外に詮すべもなかつた彼女は、その手紙を懐に入れたり、出してみたりした。符箋の紙片がその度に彼女を調戲ふやうに小さい音を立てゝ鳴る。

「お歸りになつたのかも知れないワ電話をかけてみませう。」

獨り語りながら電話室へ入つて實也の下宿へ電話をかけて見たがまだ歸つてゐないとの返事。いつ頃歸るかといつても、その程はわからないといふ。

「絹子さん。ミセス・ベルトン……ひよつとしたら。」

そんな事が彼女の頭の中を往來したので、ベルトンの所へ電話をかけてみると、丁度自分が二度目に諏訪へ行つた日の朝、ミセス・ベルトンは絹子とヨハンナと二人で信州杵掛の千ヶ瀧へ演奏に行つたきり、まだ歸つてゐない。

「絹子さんは、只今どちらに居らつしやいます？」彼女は聲を顫はせながら問うた。

「絹子さんは、唯今こちらの奥様と御一緒で、磯部温泉の對岳樓にゐらつしやいます。」

「ヨハンナさんは、どちらでございませう？」

「木瀬さんですか。あのお方はホテルで一晩だけダンスをなさるお約束でしたから、直ぐ何所かへ御旅行なすつたさうでございますが……」

「まア、木瀬さんが旅行なすつたんですつて……あの……おひとりで？」

彼女に取つては、それは驚くべく怪しむべき疑問であつた。しかし先方は何となく調戲ふやう

な調子で、

「さア、お一人ですか、お二人ですか、私達はおの方の番人ではございませんから……」

奈々子は吾に返つて、眞紅になつて電話を切つた。そして自分の室へ駆け込むと同時に旅行案内の地圖を擴げて見たが、磯部といふ温泉のある場所が見つからない。で、書棚にある一日の旅行といふ書物を取り出して、やつと磯部の地位を知つた。けれども彼女の心はもう磯部温泉にも、絹子の上にも用事はなかつた。一秒時も早く知りたいのはヨハンナの行方であつた。

「私は卑怯だけれど、ヨハンナさんは大膽です。私は眞剣に自分を投げかけてみても、いつしかそれが慎みのない態度だといふ自責の念から、自分と自分を誤魔化してしまふ。けれどもヨハンナさんは一直線に踏込んで行きなされる。ひよつとしたら……」

そんな事を思ふと、もう彼女は起つても居ても堪らなくなる。

今日もまだ實也は下宿へ歸つてゐない。奈々子は狂ひさうになる自分の心をぢつと抑へつけながら頻りに彼の行方を考へてゐるうちに、ふと今朝配達されたA新聞を見ると、その學藝欄に、

「アルヌルツスモンタヌスの著書アトラス・ヤバネンジスに現れたる日本の政治」といふ論文が載つてゐる。其筆者の名がN大學教授ドクトルフヒロソフイイ坂本實也」とあつたので、彼女は踊り上らんばかりに喜んだ。で、早速店員の一人をN大學にやつて實也の居所を聞き合せると、實也は玉川新町に引越してゐる事がわかつた。何度下宿へ電話をかけてもかけても、まだ歸らないと言つたのは、彼が口止めをして置いたのであらう。

彼女は符箋のまゝの手紙を、更に新しい封筒に入れて、玉川新町へ送つて置いたあとで、

「實也さんは、あの手紙を御覽になつて、すつかり私を輕蔑なさるんぢやないか知らぬ。」などと思つてゐるうちに、彼は思ひがけなくもヨハンナから一通の手紙を受取つた。

奈々子さん。

私達は今この様名山上に来てレーキサイドホテルに宿つてゐます。

奈々子さん。

私達といふ複数は、私とそれから今一人の「彼」です。

その「彼」といふのを全體誰だと思召す？

「彼」は嘗てあなたを極度に愛してゐました。あなたが諏訪から木曾まで實也さんの後を慕つて行らした時、「彼」は誤つて輕井澤の方へ行きました。それはあなたが千ヶ瀧のサンマアハウスにゐらつしやると思つたからでした。しかし輕井澤には、あなたが居なかつたかはりに私がゐました。

奈々子さん。すべてをあけすけに申します私です。お心を平かにしてお読み下さいまし。

私は、彼を拉して磯部から妙義、赤倉、草津と遊び廻り、伊香保からこゝへ参りました。もうこゝでは拾が必要ですよ。私はかうして、あなたを苦痛からお救ひ申してゐます。私はあなたが一日も早く坂本さんと御結婚なさる事を心から祈つてゐます。

私は今「彼」と楽しい人生を享樂してゐます。あなたはもう、「彼」から苦痛を受ける患はありません。絹子さんも、實也さんにお心残りはありません。あの人の第二のハズバンドは洋行といふ希望ですから……絹子さんは今後全生涯を音楽に捧げる決心ださうです。ミセス・ベルトンはいよく近いうちに日本を引揚げます。絹子さんも御一緒ですよ……。今、「彼」が次の室から私を呼んでゐますからこれで失禮致します。

読み終つた奈々子は、眼の前の濃霧が一時に霽れたやうな感じがした。自分の歩むべき一筋の路がはつきりと見えた。天候の險惡を氣遣はしげに、夕暮の空に鳴き惑うてゐた鳥の一群が、各々の塹を見つけた時のやうな安堵を覺えた。

「やつぱり、みんなは、行くべき所へ行つてしまつたのだワ。私の運命だつて、なんとかきまりさうよ。」

そんな事を思ひながら、家を出た奈々子は、萬世橋から電車に乗つたが、今日に限つて何となく、ボンネットの色が氣になつたり、頸飾の玉が大き過ぎたり、手袋の色が氣に入らなかつたりする。

澁谷驛から玉川電車へ乗替へる時も、電車へ乗つてからも、萬一實也と摺れ違ふのでは無いかと思つて、反對に走る電車の方に注意を怠らなかつた。

やがて電車は新町の小さい停留場に停つた。彼女は轟ろく胸を抑へながら線路を横ぎつて、櫻

の並木の方へ歩いて行つた。

大きな立看板があるので近寄つてみると、ローマ字改良の趣意を書いてあるらしい。そんなものを詳しく讀んでゐる暇も餘裕もない。病葉の落ち散つてゐる櫻並木の下を一直線に突き抜けて、小さい料理屋の前まで来ると、路が左右に分れてゐる。

「一寸お伺ひ致しますが、近頃こちらへお引越しになりました坂本實也さんは、どちらでございませう？」

料理屋の前に立とまつた彼女は、丁寧に叩頭をしながら訊いた。

「あ、あの大學の先生でせう。あのお方はこゝを右へお出でになれば、表にいろんな草花の咲いてゐる家がありますから……その草花のある家がある先生のお家でございます。」

主人らしい四十がらみの男が松林の方を指さしながら教へてくれた時、彼女は泣きたい程嬉しかつたので、

「どうも……」とだけ言つて、小走りに右の方へ走つた。

松原を通つて一町ばかりも歩くと、突如として赤白紫の草花が彼女の前に現れた。

奈々子はその花を見た時、もう胸が煮え返る程騒いだ。何と言つて入つて行つて善いか知らないほど心が混亂してゐた。

やつと決心して入つて行くと、玄關の所に若い書生が一人立つてゐて、ちろくくと奈々子の方を見てゐる。

「御免下さいまし、坂本先生のお宅はこちらさまでございませうか。」奈々子は顫へを帯びた聲で問うた。

「えエさうです。何か御用ですか。」書生は明確な聲で問返した。

「私は木瀬と申す者ですが、一寸御面會いたしたいのでございます。」

「先生はお留守でございます。毎朝七時前にお出かけになりますが、お歸りは大抵午後の十時過ぎでございます。」

「學校では夜學もお教へになるのでございますか。」

「いえ、夜學は教へてゐませんが、大學の講義の外に平和協會の事務もございませうし、それから大抵毎日五六時間は圖書館で調べものをなさいませうから。」

「十時前にお歸りになる日はございませんでせうか。」

「さうですネ、大抵十時過ぎでございます。その頃お歸りになりましたら、二時頃まで翻譯をなさいますから……まア電車の中が先生の休憩所でございます。」

書生は圓い頬に微笑を浮かべながらさう言つて、彼女の顔をぢつと見詰めた。

奈々子は澁谷驛まで来て、實也の出勤してゐる大學に電話をかけてみると、小使らしい男の聲で、

「坂本先生は唯今授業中でございます。」と言つた。

「では丁度御休憩時間の頃、木梨といふものが、お伺ひいたしますからとお傳へ置き下さいまし。お願ひいたします。」と言つたが、男の聲は、

「駄目ですよ、坂本さんは學校内で、どなたにも御面會はなさいませぬ。」と邪慳に突ツ放してしまつた。

「授業がお済みになれば宜しうございませうか。」

奈々子はワケなく悲しみに打たれながら問うた。

「駄目ですネ。授業がお済みになると、直ぐ圖書室にお入りになりますから。」

「しかし圖書室は夜まで開館なさないんでございませう。」

「坂本先生は特別ですから。」

男の言葉があまり無愛想なので、奈々子はそれ以上問ふことも出来なかつた。で、泣きたいやうな氣分に追ひかけられながら、家に歸つてみると、テーブルの上には、たつた今配達されたいしい、ヨハンナの手紙がのつてゐた。

奈々子さん。

私達は山を降りました。そして此の湯比曾ゆひその山中に来て、靜養してゐます。

彼は私に結婚を迫ります。けれども私はまだ承諾を與へないでゐます。何故ならば私の希望は將來ステージに立つ事であり、彼はやはり堅くらしい經濟を論ずる専門から離れないでせうから、どうせ終りを全うしないだらうと思ふのです。

私だつて、すつかりお轉婆をよして、おとなしい奥様になればなれない事ありません。でせ

うけれど、まだそんな氣持にはなれませんの。

彼と二人の旅には、音楽も踊も詩も無いんですもの、もう都會が戀しくなりました。私達の事が新聞に載つてゐるんですつてネ。どうせ書かれると思つてゐたんだから、別に驚きもしませんけれど……

まだ讀まなはつた今日の新聞を見ると、實也の書いたアトラス・ヤバネンジスに就ての研究が載つてゐる。讀んでみると、

彼等の眼に映じた日本人は、しかく慧敏なる者とせられてゐる。この戦争好きの國民が、凡ての爭議喧嘩を避けんがために注意深く警誠し、兩者の間に舊き怨恨ある時は、これを口舌に現さず、唯悲しげなる表情を以て嫌忌を示すばかりであるとした彼等の洞察力は驚くべきものである。實際日本人の性質は、戀愛を避けんがために警誠し合つてゐる。假令相愛するとも、これを口舌に現さず、唯嬉しげな表情を以て千萬言に代へるのである。

といふ文句があつた。それを讀んだ奈々子は、救はれたやうに思つた。  
で、直ぐ實也に宛て、

お目にかゝりまして、お話し致したい用件がございますので、上野精養軒までお足勞を願ひた  
うございますが、御都合の日をお示し下さいませんか。

と書いて、自分でそれをポストへ入れに行つて、ぶらりと家に歸つてみると、店員の政子が、

「唯今坂本さんからお電話でございます。」と言つた。

奈々子は電話室へ轉け込むやうに入つて行つて、受話機を手に取るや否や、「もし、坂本さ  
んでらつしやいますか。」と泣聲になつて呼びかけると、

「いゝえ、僕は受付けのものです。……今朝程は失禮いたしました……あの坂本先生が、今日  
の午後七時頃お宅へお伺ひ致しますから、さうお傳へしると申されましたので……」と言つたの  
は、確に今朝彼女を邪慳に突放した男の聲であつた。

奈々子は自分の耳朵が急に火照るのを覺えた。

室に歸つてみると、時計は丁度短針が五時の所を指してゐる。あと二時間……それは奈々子に

取つて如何にも待遠しい百二十分であり七千二百秒であつた。

何度も何度も化粧室に入つてみたが、實也の書いた「假令相愛するとも、これを口舌に現はさ  
ず、唯嬉しけな表情をもて千萬言に代へるのである。」といふ文句は、彼女の手を白粉刷毛に觸  
れしめなかつた。フランス歸りの友達から贈られた洋服を出して見たが、胸の飾りが葉出過ぎる  
ので、それも着る事を見合せた。

時計は六時を過ぎた。奈々子は決闘を申し込まれた人のやうに興奮しながら、實也が來たな  
ら、何と言はうか、どうしようかと考へつゞけてゐた彼女は、まるで戦術でも研究する時の氣持  
になつてゐる自分を苦笑せずにはゐられなかつた。

「あア、もうあと三十分！」

嗟くやうに言つて、兩手を長くテーブルの上に投げ出した彼女は、左の腕に頬べたを押しつけ  
て、

「私、實也さんにお目にかゝつても、何にも言はないで……やつぱり何にも言はないでませ  
う。それがいゝ。」と呟いてゐる時、ドアの外にノックの響きが聞えた。

「はい、どなた？」

左の手だけをテーブルの上に残してドアの方を見た時、ドアが細目に開いて、店員の政子の顔が見えた。

「あの坂本さんがお見えになりました……」

「まア、もう入らしたの？」

奈々子は努めて沈着を示しながら立ち上つた。そしてドアの所へ走つて行くと、店員の後に立つてゐた實也は、につこりと笑つて一寸頭を下けた。

「今朝お宅へ参りましたのよ。」奈々子は手を出しながら彼の顔を見上げた。

「さうですつてネ。失禮いたしました。」

實也は軽く彼女の手を握つて、吾から進んで椅子を求めた。

「学校の受付のお方に、電話でひどく叱られましたネ。」

「さうですか、それは失禮いたしました。實はこの間フランスの作家で、まだ日本にはあまり名の知れない人の小品を翻譯しましてネ。それをA新聞へ載せたのです。所がその翻譯が問題にな

つて、いろんな人が訪問に来るんです。僕も最初は相手にしてゐましたが、文學青年といふ人達は、文學に熱心のあまり、こちらの仕事のことなんか、ちつとも考へて呉れないで、半日でも一日でも座り込まれるんで、さすがの僕も、たうとう参つてしまつて、今では一切の訪問客を謝絶してゐるんですよ。」

「では、私も文學青年の一人になつたワケですネ。」

「まアさういふワケですなあ。」

「しかし、僕はわざ／＼其釋明に参つたのです。」と言つた實也は極めて自然な微笑を口元に泛べた。

石階の下で自動車を降りた二人は、涼しい風にはらく／＼と散る櫻の下を黙つて歩いてゐた。

「この櫻がマロニエールだつたら、リュクサンブールの公園といふ所ですがネ。」

實也はステッキを引すりながら、さう言つて沈黙を破つた。



「モンバルナスの並木の下ぢやあ無いの？」

奈々子は葉出な洋服を買つて来て呉れた、お友達の土産話を想ひ出しながら言つた。

「モンバルナスの並木の下にはお化が出来ますからネ。」

「さうだつてネ、綺麗なお化なんでせう？」

「そりやあ、綺麗ですとも。綺麗でなきやあ誰も振向かないでせう。」

「其の綺麗にお逢ひになつた事がありませんの？」

「ありますとも、僕があらちらに行つて二三日後でした。僕が例の並木の影を踏んで歩いてゐると、僕の後から（モシモシ、日本のお方）なんて呼ぶんでせう。驚いてしまつたネ。」

「まア、日本語なんか遣ふんですか。」

「日本人は彼等にそれ程甘く見られてるんですよ。」

「で、あなたは何とお答へになりました？」

「駄目だよ、馬鹿野郎！ ツて呶鳴つたネ。」

「日本語で？」

「勿論。下手なフランス語なんかつかはうもんなら、直ぐ咬へ込まれてしまひますからネ。」

「そんなに敏腕なの？」

「敏腕ツて、ヨハンナさんなどの及ぶところぢやありませんよ。」

實也は振返つて、電燈の光りに照らされてゐる奈々子の白い顔を見ては、ムムと笑つた。

「ヨハンナさんてば、度々私にお手紙を下さいますのよ。」

奈々子は話が段々本題に入りさうになつたのを喜んだ。

「僕の所へも行く先々から必ず繪葉書を呉れますよ。」

「まアあなたの所へも？」

「その端書には必ず板垣君には秘密だ秘密だと書いてゐます。」

「何故でせう？」

「さア、何だか知れないが、相當に考へがあるんでせう。」

「私の所へは、幹二さんと御結婚はなさらないだつて、そんな事を言つて來ましたワヨ。」

「それはヨハンナさんの正直な告白でせう。今さら眞面目くさつて結婚生活でも無いでせう、あ

の人の氣質では。」

「何故でせう？」

「ヨハンナさんは、あれだけ幹二君を愛してゐながら、随分幹二君から無視されてゐたらしいですよ。そいつが今度ヨハンナさんの勝利に歸したんですもの、うんと復讐されますよ。」

「復讐？ どんなワケで？」

「今まで冷淡にされてゐたんですもの、今から後のヨハンナさんは女王ですよ。これから後の幹二君は奴隷だね、きつと！」

實也はククと微笑した。奈々子は實也のこの言葉に深い暗示が潜んでゐるのではないかと思つた。で、黙つて歩きながら、

「長い間愛してゐて、顧みられなかつたのは、ヨハンナさんばかりではない。私だつて随分長い間實也さんに返報のない愛を捧げてゐたんだ。だから實也さんは、今更私に近寄ると、その復讐をせられると思つてゐらつしやるのかも知れない。」などと思つた。

「ではヨハンナさんは、御結婚なさらないで、その結果どうなるんでせう？」

「幹二君は宜い加減慰まれて、その末すつほかされるでせう。ひどくネ（その壊敗大いなり）といふやつだ。」

實也はまた靜かに笑つた。奈々子は何となく、自分が遠廻しに虐め苛なまれてゐるやうな無氣味さを感じた。

東照宮前まで來た時、實也は不意に立停つて、

「では奈々子さん、僕はこゝで失禮いたします。一寸池の端にゐる友人を訪問しなければなりませんから。」と言つた。その言葉には殘忍と冷酷と他人行儀とが明かに交錯してゐた。

「どう？」とだけ言つた奈々子はぢつと下唇を咬んでゐた。

さうく折角釋明に來て置きながら、お手紙の事を申しませんでしたネ。實也はあのお手紙を受取つた時、僕はよつほどそのまゝ拜見しないで、机の抽出しにでも入れて置かうかと思つたのですが、それも失禮だと思つて拜見はしましたが、あとで後悔するやうな事があつてはいけないと思つたので、お返事は差上げませんでした。」

實也はさう言ひながら、もう坂を下の方に降りつゝあつた。

「私に手紙を下すつたら、後悔なさるかも知れないと仰しやるのは？」

奈々子は悲しげに聲を顫はせて追ひ縊るやうにした。

「それは僕のみの問題です。僕は今あなたに對して、一種の恐怖を感じてゐるんですよ……人間といふ者は案外弱いもんですからね。」

「では、幹二さん達のやうに、新聞にでも書かれては大變だと思ひなさるの？」

「そんな事はありません。僕があなたにお手紙をあけたつて、そんな事が新聞記事になる筈はないぢやありませんか。」

「では、どんな事を恐れてゐらつしやるんです？」

「つまり誘惑を恐れるんです。丁度高等學校時代に、あなたと文通を始めて、すんでの事で學校を落第しかけたやうに、も一度僕はあなたといふ異性のために、身を過りさうなんです。僕は夫れが恐ろしいんです。」

實也は憶する氣配もなく、そんな事を言ひきつてしまつた。奈々子は甚だしい侮辱を感じながら、

「では、實也さん。あなたは私をモンバルナスの並木の下に出没する女と一緒に見てゐらつしやるんですネ」と言つた時、彼女は自分の臉が焼けるやうに熱いのが感じた。

「さうです。正直に言へばさうなんです。僕は始めてモンバルナスの並木の下で美しい婦人を見た時、男と生れた以上あんな美しい婦人を自由にしないでは……といふやうな心が、むらくと起りました。それは眞實です。しかしそれが所謂戀でも愛でもない事は言ふまでもありません。けれども一番最初にあの並木の蔭で僕に言葉をかけた女の聲も、その容貌も、今に僕から離れません。時々それが僕の魂を揺ぶりに來ます。それは偽らない僕の告白です。そんな女とあなたと一緒にする事は、さぞ御不快でせうが、つまり僕に取つては同じことなんです。始めて江東寺の前の煎餅屋でお會ひした幼馴染のあなたが、僕の魂の一部分をいつも揺ぶつてゐるやうに、嘘でも何でもよい、フランスで最初に優しい言葉をかけてくれた、名も知れないその女の幻影が僕の魂に住み込んでゐるんですネ。」

その時二人はもう電車の線路を踏切つて池の側まで來てゐた。

「では、あなたはそのフランスの美しい婦人を可愛さうだと思つてゐらつしやるんですの？」

奈々子は枯れかゝつた蓮の葉を見詰めながら問うた。

「僕の友人は、そんな婦人のために祈つてゐました。僕もやつぱり祈つてあげたいと思ひます。」

「その婦人が罪の生涯から救はれるやうにつて？」

「勿論さうです。友人は、(神様、どうぞ今夜あの女に好い男を見つけてやつて下さい。そして楽しい温かい一夜を過ごさせてやつて下さい。)と言つて祈りました。僕も同じ言葉で……」

言ひかけた彼は、ふと顔を擽げて奈々子の横顔を見た。蒼白いサアチライトの光りは、彼女の頬を傳つて流れる細い銀線を斜に照してゐる。

其時の奈々子は實也の言つてゐる逆理の意味が、わかり過ぎる程解つてゐたのである。

「實也さん！」

暫く間を置いて呼びかけた奈々子は、「私、申上りたい事が澤山あるのです。ただどうかうしてお目にかゝると、どうしたものか思つてゐる十分の一も言へなくなつてしまふんですもの。」

「それが日本人の特長です。それでいゝんです。」

實也はことさら大きく歩きながら言つた。

「だからネ、お願いです。私、こゝに私の思つてゐる事を、存分に書いた手紙をもつてゐるんです。これをお読み下さいませんか。」

彼女は手紙を差出すだけの勇氣も無く、ポケットの中でそれをぶり／＼鳴らしてゐた。

「夫れは御免蒙りませう。もう御互はすつかり氣心が知れ合つてゐるぢやありませんか。僕はやつぱり、かうしてお目にかゝつて、かうして別れるのがいゝと思ひます。僕はたえずあなたの爲に祈つてゐますから。」

「マロニエールの木影に立つフランス女と一緒にでせう？」

奈々子は前歯を咬み合せて、彼の横顔を怨めしさうに見た。

「友人の祈りの通り……僕もあなたの幸福を祈りませう。」

實也は線路のカアブの所まで来た時、さう言ひながら彼女の方を振向いて、一寸頭を下けたまま人込の方へさつさと歩いて行つたが、奈々子にはもう、そのあとを追つかけるだけの勇氣もなかつたので、出来るだけ人通りの少い所を歩きながら、成るべく好意に好意にと彼の言葉を解釋

してみたが、

「モンバルナスの並木の下で媚を賣る女と私……何といふなさけない配合だらう？」と思ふと、彼がその時叫んだといふやうに、彼に對つて（馬鹿！）と叫んでやりたいやうにも思ふ。けれどもその憤りが消えると、後には戀しい慕はしい實也ばかりが残る。のみならず、いつしか「本當にさうだワ。私は自覺しないけれど、私もやつぱり媚を賣る憐れな女なんです。（モシモシ日本のお方）と知つてゐる限りの僅の言葉を皆な遣つて媚を呈するやうに、私だつて智慧のありつたけを、感情の底をはたいて、實也さんに呼びかけてゐるんです。その女は生活のために……私は戀しさのために……同じ事です、同じ事です。」

奈々子は思はず自分の服装を見廻した。そして自分の着てゐる着物が、その憐れな女の着物に似てゐるのではないかと思つた。けれどもその癖みは直に消えてしまつた。そして實也の言つた言葉の斷片が残つた。

「男と生れた以上、あんな美しい婦人を自由にしないでは……」

彼女はまた急に浮かみ上つたやうに感じた。實也さんが仰しやつたやうに私はついても實也さん

の魂を揺ぶつてゐます。そして本當の私の心を見詰めて下さるまで、私は實世さんの魂から離れません。」

彼女は胸を張りながら靴音高く坂を上の方へ登つて行つた。けれども間もなくその張り詰めた心がまた俄かに弛んでしまふ。

「神様どうぞあの女に好い男を見つけてやつて下さい……何といふ悲しい皮肉な言葉でせう。實也さんは、あア言つて私に早く他の人と結婚なさいと諷刺なさるんでせうけれど……私は、私はそんな祈りなんかして戴きたくはありません！」

彼女の心はまた興奮し始めた。

奈々子は其後何度も何度も、手紙を出し端書を送つたが、實也からは何の返事もなかつた。用事があるからと言つて、どれだけ電話をかけて呼出さうとした事か。それは悉く無駄骨であつた。

彼女はもう疲れてしまった。頭の中は重い石でも入れられたやうである。全身は濃霧の中に包まれたやうに自分自身の存在を自知する事は出来るが、一寸先は唯手探りである。勇氣を出して走つても走つても、いつも同じ濃霧の中にある、前路も見えなければ、左右も判らない。何所かで霧を隔て、實也の聲が聞えるやうではあるが、しかも方角がわからない。

「私は死んでしまひさうだ！」

彼女は人のゐない所で、いつもさう呟く。けれども、どうしたものか、今はもう實也の所へ押かけて行くだけの勇氣も無く、たゞひとり一室に閉ぢ籠つて實也の事を思つては泣き、考へては泣くだけである。もしも、お友達の中に、今の私のやうな境遇にある人があつたなら、私は其人の意氣地無さを嘲笑ふでせう。しつかりなさいな。すつかり打ちまけて、碎けるまでも當つて御覽なさいな！ といつて勵ますに違ひない。所が今の私は、何故かひどく病的に弱い。十五年來親しくしてゐる實也さんに……こんなに長く交際してゐる實也さんに、なぜこの惱みを打あける事が出来ないのか知ら？ いつその事、實也さんから（僕は君を嫌つてゐるんだ！）と、あつさりおつしやつて下さるなら私はあるひは諦めてしまふのかも知れない。しかし實也さんは長い間

交際をしてゐる私に、それがいへないのではないでせうか。いえ、實也さんもやつぱり私を愛してゐるといふことが出来ないで苦しんでゐらつしやるのでは無いか知ら？……だつてそれは私の都合點かも知れないワ。」

斯うした事を返繰し繰返し考へてゐる彼女は、自分の心が、段々と歪み癖んで行くのが、はつきり見える。

「唯今坂本實也さんからお電話でございます。」

ノックに續いて聞えたその言葉が、あまりに不意だつたので、彼女は自分の耳を疑はざるを得なかつた。

「坂本さんからお電話ですつて？」

奈々子はベッドの上から、ドアの方を見ながら言つた。

「えエ、一寸お電話口までお出を願ひたい——つて。」

ドアを細目に押した政子の、黒い瞳が一つ美しく見えた。

「すまないがネ、ちよいと御用事を承はつて置いて頂戴な。私、起きるのが大儀だから。」

彼女は飛び立つ思ひを強いて抑へながら、故意にさう言つて寝返りを打つた。スプリングが軽い音を立て、床に響いた。畏まりました。といつて政子の腫が消えた時、彼女は撥ね起きてベッドの上に座つた。そして、會ひたい會ひたいと思つてゐた彼の電話を、自分自身で聞く筈であつたと思つたが、もうその時政子の顔が再びドアの所に現はれた。

「あの……坂本實也さんが、今日午後六時頃、一寸お伺ひいたしたので、御都合は如何でございますかと申しますが……」

その言葉を聞いた彼女は、熱湯に浸したタオルを頭からすつほり被せられたやうに思つた。

「さうネ、私、こんなにやつれてるんだから。」と口の中で呟やいた彼女は、仰山さうに眉を寄せながら、「あのネ、この間から加減が悪くつて臥つてゐますので、お出で下すつても、大變取亂してゐますが……つて、それだけ言つて置いて頂戴な。」

「彼女はさう云つたあとで、私が病氣だとお聞きになれば、きつと駈けつけて下さるワ。そして病氣の原因をお訊きになつたなら、今日こそすつかり言つてしまひませう。」と口の中で呟きながら、顔に撫でかゝる後れ毛をいぢつてゐた。すると、程なく歸つて來た政子は、ドアから片足

だけを中心に踏み入れて、

「坂本さんは、明日から御旅行なさるさうでございます。それで御病氣でございますなら、又後日お伺ひいたしますつて……」

「では入らつしやらないの？」 奈々子の聲には鋭い劍が含まれてゐた。

「えエ、失禮いたしますから、どうぞお大事に……つて申されました。」

「あゝさう。そんなら夫れで宜いワ。」

奈々子はくるりと窓の方に寝返つた。政子がドアを閉めて外へ出た時、彼女は蒲團を烈しく撥ねてベッドを迂り出た。そしてよろけながらドアの所へ走つて行つて、かちりと激しい音をたてて鏡をおろした。

「來て下さらない。病氣だと知つても來て下さらない。いゝワいゝワ。もう來て貰はなくとも宜いワ。そんな薄情な人を愛してゐた私が馬鹿だつたのです。私はこのまゝこゝで死んでしまひます。本當に死んでしまひます。」

奈々子は子供のやうに肩を揺ぶりながら壁に凭れて泣いた。

「私が死んだといふことを聞いた時、實也さんはどう思ひなさるでせう。棕櫚しょうろの枝で打かれた蜘蛛の屍が畳の上に一つ轉がつてゐる程にも、お氣に止めては下さらないかも知れない。」

彼女は蜘蛛のやうに壁にべつとりと全身を投げかけて、両手を高く差上げた。

「實也さんは、やつぱり絹子さんに還つて行らつしやるんだ。屹度さうだ。だから私の手紙にお返事を下さらないし、何度頼んでも来て下さらなかつたのだ。」

そんな事を獨断すると、彼女の胸は煮えくり返るやうに苦しかつた。と同時に彼女の心の中から一種の強い執着が芽生えて来て、深い深い憎惡の念を與へるのであつた。

「いゝえ、私は死んではいけない。私は生きてゐて、實也さんの行爲を見届けます。私は死んではいらない！」

彼女は壁から離れて、ベッドに戻つた。そして、ぐつたりと身體を投げてゐると、頭がづきんづきんと痛む。胸は遠潮のやうに鳴る。時々左の頬のあたりから耳の後へかけて、小さいく無数の生物が皮膚の下を這ひ走るやうに思ふ。汗がたら／＼と頬から流れる。

「御免なさい、御免なさい。」ノックと共に聞える聲は？

「御免なさい。坂本です。御病氣ださうですネ。」それは確かに實也の聲である。坂本さんがいらつしやいました。もうし、坂本さんがいらつしやいました。」

政子の聲が、實也の聲と參差まじりんで聞える。

奈々子は撥ね起きた。ハンカチーフを強く口に衝つへたまゝドアの方を睨んだ。「開けに行かう！」「否え、行つては行けない。今までの彼の人の仕打を考へて見るがいゝ。」といふ二つの聲が彼女の心で交互に叫び合ふ。

「實也さん。あなたはいつでも、私をなま殺しになさるんです。今の今も、お出でにならないと仰しやつて、私を失望させて置いて、またひよつこりと入らつしやる。あなたは私を撈つかつてゐらつしやるんです。」

彼女は大聲で斯う叫ばうとしたが、喉が乾からびてちつとも聲が出ない。

「一寸お見舞に上りました。もしもし……」

「坂本さんが入らつしやいました、もし、坂本さんが……」

二人の聲は段々繁くなつたが、ベッドの上の奈々子は黙つて、火の海を泳いでゐるやうに悶え



苦しんでゐる。

實也は半月ばかり以前から軽微な不眠症に罹つてゐる。醫者にみて貰ふ程の事は無いと思つて、カルモチンを服んだり、讀書を差控えたり、訪問客を断つたりして養生してゐた。さうしてゐるうちにも新聞や雑誌からの頼みを斥けかねて、フランスの新進作家の優れた作品の紹介もした。學校の講義も休まなかつた。平和協會の事務も滞らせはしなかつた。

しかし、段々と身體の容子が變つて來るので思ひ切つて轉地してみる事にした。で、學校へ行つて休講の手續きをして置いて、平和協會へ事務の打合せに行つた序に、久しぶりで奈々子の所へ自分で電話をかけてみたのである。

彼はその後奈々子からの端書も手紙もみんな讀んでゐた。しかし何となき氣不精から一度も返事は出さなかつた。度々電話をかけて會ひたいと言つて來たが、運悪くその都度先約があつたり、會議があつたり、氣分が勝れなかつたりして會ふことも出來ないでゐた。だから自分からの電話ときいたなら、彼女は電話口へ飛んで來るだらうと思つてゐた。所が奈々子は病氣だといつて出

て來なかつた。

彼は自分の不眠症になつた原因を知つてゐた。恐ろしい勢ひで燃え廣がつて來る野火が、自分の家を取捲いてゐる時、もうこのまゝではゐられないといふ事は能く知つてゐた。しかし彼は自分が奈々子と結婚することは、奈々子のために不利益であり不幸であると信じてゐたので、ちつと耐へて自分を制してゐた。彼は理性で戀愛を輕蔑しようとしてゐるが、やつぱり感情は彼を動かし彼を懐ます。奈々子からの手紙を見るたびに、冷かな態度で一笑に付し去る。しかし心の奥底には彼の全身をざり／＼と焼く或ものが潜んでゐる。彼は奈々子の甘い言葉を陳ねた手紙を見るたびに、フランスのマロニエールの木蔭で見た賣春婦の事を思ひ出す。大磯で始めて會つた絹子の事を思ひ出す。馬鹿にけば／＼しい服装をして自分を横濱の岸壁に迎へに來てくれたヨハンナを思ひ出す。そして、要するにその四人の心理は同じ事なんだといふ結論に達する。斯くて女といふ女はみんな媚を賣つて生きて行く動物だといふ残酷な結論を得る時、彼はその反面に、男性が如何に女性に媚びたがりつゝあるかといふことを強く反省させられる。自分が極めて少しく心の手綱をゆるめるなら、すぐ一たまりも無く奈々子の優しい愛に溺れてしまひ、嘗て自分を捨

て去つた絹子の涙に欺かれてしまふのだと思ふ。物心づいてから今まで自分の精神を一番強く動かしたものは、やはり異性の魅惑であつたといふことを、つくづく思はせられる。

「自分は人類の平和問題について神経衰弱を起したことはない。あの恐ろしい歐洲大戦に際してすら、不眠症を起す程心を痛めはしなかつた。しかし今自分は神経衰弱症に罹り不眠症になつてゐる。それは一體何のためであるか。」

彼はそんな質問を自分自身に對つて毎日のやうに發した。そして或時は、ひどく自分を叱咤して、「思ひ切つて奈々子さんと結婚すればいゝぢやないか!」と言つてみる。しかし、どうしたものがそれに對して斷行の勇氣が無い。

もう幾度か奈々子は彼に結婚を熱望して來た。彼女の手紙には「この望み叶はずば、死ぬる外なし。」などさへ書いてあつた。それを讀むだ時、彼の魂は地震に襲はれた塔のやうに震へる。しかし返事を書かうとすると、もう何となく氣不精になる。絹子の生靈が彼の心に入込むのである。もう幹二の手から離れてゐる絹子の艶めかしい流盼が彼の記憶によみがえるのである。

斯うした彼が、奈々子に自ら進んで電話をかけたといふことは、彼と奈々子との運命に一つの新生面を打開く近道であつた。しかし、奈々子は其の運命を自分から拒絶して、わざと電話口へ出て來なかつたのである。

その時彼は、ぐつと胸倉を取つて引寄せられたやうに思つた。

「私の愛に酬るなかつた罰よ。」といつてゐる彼女の姿がありくと見えた。で、彼はすぐ彼女の家を訪問して、政子と二人で、交る交る聲をかけたが、たうとうドアは開かなかつた。

「お寝みになつてゐらつしやるんでせうから、旅行から歸りまして、またお伺ひいたしませう。」  
「いゝえ、たつた今私はお話したんでございます。」と言つた政子は、不安さうにノックを續けた。しかし、室の中からは何の答へもなかつた。

「では、お眼覺になりましたならこれをお渡し下さい。」  
實也は旅行先を書いた名刺を政子に渡して置いて、リオン商會を出た。

「奈々子さんはきつと僕を怨んでゐるんだ。しかしそれは正當である。僕は自分の意志を明確に表示し得ないのだ。僕は何といふ卑怯な男だらう。僕は確に奈々子さんを愛してゐるんだ。しかし何故奈々子さんの愛に酬ることが出來ないのであらう。」

そんな事を思ひ続けながら、玉川の家に戻つてみると、門の所に一臺の自動車が横はつてゐる。

「誰だらう？」と思つて玄関の方を差覗くと、其所に立つてゐるのは正しくヨハンナの姿。

「おや、丁度お歸りになりましたワヨ。まあよかつたこと！」

ヨハンナは五六歩門の方へ駆け出して来た。

「やア、いつお歸りになりました！」實也は強いて氣を引立てながら右の手を出した。

「私、今朝歸りましたの。是非お眼にかゝりたい事がございまして、今朝からあなたの後ばかり追ひ廻してゐましたのよ。」

ヨハンナは強く彼の手を握つて、につこりと笑ひかけた。相變らず妖艶な輝きが彼女の顔に漲つてゐる。

「兎に角お入り下さい。こゝではお話も出来ませんから。」

「では、一寸お邪魔させていただきます。」ヨハンナは彼の後について來ながら、「あなた、たつた今木瀬さんの所をお尋ねなすつたのネ。」と笑ひを含んだ聲で言つた。

「えエ、参りました。しかし、お目にかゝれませんでした。」

「さうだつてネ、私、電話で伺ひましたの。」

「奈々子さんは電話口へ出ましたか。」

「えエ出ましたとも。どうして？」

「病氣だとおつしやつて、僕には會つて下さいませんでしたよ。」

「さう？ それ位の復讐はなさいますでせうよ。おとなしい奈々子さんだつて……」

實也は黙つて應接室へ入つた。ヨハンナは脱けかけるスリッパを引摺りながら彼の後から跟いて來て、安樂椅子にぐつたりと身體を落した。

「坂本さん、私、板垣さんと、ひどく喧嘩しちやつたのよ。」

ヨハンナは頸飾りをいぢりながら言つた。

「喧嘩を？」

「えエ、私、喧嘩して逃げて來ちやつたの。」

「何所から？」

「私達はあれから別所温泉に行つてゐたのよ。所がネ、私達は何でも無い事から、一つ争ひ二つ争ひしてゐるうちに、たうとう大喧嘩になつてしまつて、私は幹二さんを置き去りにして、ぶいと歸つて來たのよ。」

「で、それを僕にどうしろと仰しやるんです？」

實也は不思議さうに彼女の顔を見た。ヨハンナはにつこり笑つて彼の方に向き直つて、竦めた肩の間に首を縮めながら、

「あなたの御意見をお伺ひ致したいの。」

「僕の意見を？」彼は眼を見張つた。

「えエ、あなたは奈々子さんと御結婚なさいますかどうか、私それをはつきり承はりたいの？」

「それを聞いて、どうなさるんです？」

「私にも考へがありますのよ。」

「僕も實は夫れについて迷つてゐるんです。實は奈々子さんから、結婚を申込んで來ました。僕も奈々子さんを憎くは思つてゐません。しかし、どうしたものか、いざといふ場合になると、

僕はイエスと言ふ事が出來ないんです。それは自分にも解らない心理現象なんです。」

「あなたはまだ、絹子さんの事を全く思ひ切つてゐらつしやらないんでせう？」

ヨハンナは椅子の縁に右の腕を衝きながら言つた。

「否エ、僕はすつかり思ひ切つてゐます。」

「では、奈々子さんとなぜ御結婚なさらないんです？」

「つまり僕の心が定まらないんです。」

「本當に！ 早くお定めにならなければいけませんワヨ！」

ヨハンナは椅子を揺ぶりながら作り笑ひをした。

「あなたは板垣君と喧嘩をなすつたと仰しやるが、その喧嘩とこんな質問とに、どんな關係があるのですか。」

「私はあなたが、奈々子さんと御結婚なさるのだといふ事を承はれば、それでいゝんです。」

「どうして？」

「幹二さんはまだ、どうしても奈々子さんを思ひ切れないんです。けれども奈々子さんは最初か

ら、ちつとも幹二さんを受してゐません。』

「わかりました。あなたが僕に御相談があると仰しやつたのは、つまり僕が奈々子さんと結婚するかどうかといふ事を確めに入らしたんですネ。」

「えエさうなのよ。それは私達の運命を定める事なんですもの。』

「よく解りました。ではあなたまで申しませう。僕には奈々子さんと結婚してもいゝといふ意志があります。しかし、いざと云ふ場合に、僕の心が馬鹿にいぢけてしまふのです。』

「では、私が其の仲に立つて、あなたのお心持を、奈々子さんにお傳へいたしても宜しいでせうか。』

實也は異様な感じを懐いた。で早速に返事をしかねてゐると、ヨハンナは諭すやうな口調で、  
「御安心なさいまし。私、これから奈々子さんの所に参つて、あなたが、御結婚の意志を十分におもちだといふ事を、奈々子さんに傳へておきますワ。其後の事は、私、お手を袖に容れて、ちつと觀てゐるだけよ。ね、それがいゝでせう。その代り私達が結婚しようと、しまいと、それもちつと觀てゐて下さいまし。』

ヨハンナはもう氣早く起ち上らうとしてゐる。實也は自分の胸に堰かれてゐた水溜りが、いつしかすらくと流れ去るやうに感じた。

「あなたはこれから、奈々子さんにお會ひなさるのですか。』 實也も起ち上り乍ら言つた。

「えエ、奈々子さんに、あなたのお心を確實にお傳へして置きますワ。』

「あなたはそれから、どちらへ行らつしやいます?』

「幹二さんが長瀬で待つてゐますから。』

「あなた方は、喧嘩をなすつたのだと言つたぢやありませんか。』

「それはネ、私があなただをお訪ね致すのを……幹二さんがひどく氣にしたからですよ。だけど、私はもう幹二さんの物でせう。それからあなたは、もう奈々子さんのものですからネ。』

言ふうちにヨハンナの顔は、羞耻に堪へないやうに眞紅になつた。ボンネットの絹の總が微かに震へてゐる。

「あなたと僕とが斯うして會ふことを、板垣君が嫌はれたと仰しやるんですか。』

「もうそれ以上訊かないで下さいまし。私だつて、あなたにお別かれの意味で参つたんで

すもの……」

「別れの意味で？」

實也は氣味悪さうに彼女の顔を見た。

「御心配下さいますな。私は自殺したり心中したりするやうな、そんな卑怯な女ぢやありませんから……」と言つて、瞳を膝の上に落したヨハンナは、少しく顔を赤らめながら、

「京都時代から随分長い間のお交際でしたワネ。」

「さうです、始めてお目にかゝつたのは、僕が高等學校一年の頃でした。」

「えエ、私、よく覚えてゐますワ。同志社にフットボールの仕合のあつた時……」

「その後度々教會でお目にかゝつたのでしたネ。」

「私、その前から和歌山で、奈々子さんから、あなたの事は度々承はつてゐました。私、其頃からあなた方はもう御婚約なすつてゐらつしやるんだとばかり思つてゐましたのよ。」

「……………」實也は黙つて居た。

「あなたがお立ちの時、お見送り致しましたワネ。私と奈々子さんだけで。」

實也はその時、絹子の姿が岸壁に見えなかつた事を思ひ出した。

「外國へも度々手紙を差上げましたワネ。」實也は軽く點頭いたゞけで、やつぱり黙つてゐた。

「横濱へお着きになつた時、お迎へいたしたのも、私一人つきりでしたのネ。」

「さうでした！」實也の言葉は強かつた。

「歡迎會の晩、私はもうあなたが諏訪へ行らつしやる事を、ちやあんと知つてゐましたのよ。」

實也はも一度軽くうなづいて、椅子に腰を卸しながら彼女の顔を見上げた。

「二度目に奈々子さんと諏訪へ行く約束を致しました時も、私は奈々子さんお一人だけを、あなたのお送りするやうに、わざと芝居を打つたのよ。」

ヨハンナの話聞いてゐるうちに、彼は自分とヨハンナとの、長い年月に渡る交際が、何となく言ひ知れない深い縫れをもつてゐるやうに思はれて來た。

「それで今晚は、お別かれに來て下さつたのですか。」

實也は此時始めて、ヨハンナに對して懐しさを含んだ、しんみりした感情をもつて話しかけたのであつた。

「えエ、さうですワ。あなたはどうぞ奈々子さんを愛してあげて下さいまし、私はお二人の上に幸福の訪れを心から祈つてゐますから……」

「ヨハンナさん、私は今夜始めてあなたを本當の友達だと思ひました。僕は今まであなたを誤解してゐました。」

實也は立ち上つて彼女の腕に右の手をかけた。ヨハンナは後退りあとずさりをしながら、

「今更、そんな事を仰しやらないで下さい！私はもう幹二さんのものですから……」と言つて、壁に背を凭せて涙をのんでゐた。

「では、あなたから奈々子さんに僕の意味を傳へて置いて下さい。」

「長まりました。私、何だか大變善い事をしたやうな、祝福されたやうな氣持ですワヨ。」

ヨハンナは微かな笑ひを見せた。そして露に濡れた水晶のやうな瞳をあけて、實也の顔をぢいつと見詰めてゐたが、急に身を悶えながら椅子に身體を落してしまつた。

「ヨハンナさん！」と強く叫んだ實也は、彼女の傍らにつか／＼と進み寄つて、「これでお別れいたしませう。僕は今夜十一時の青森行きで出立する事になつてゐるんですから……」

「えエ、私、歸りますワ。早く行つて、奈々子さんに福音を聞かせてあげませう！」

ヨハンナはさう言つて、雄々しげに立ち上つた。そして焼けつくやうな瞳でぢつと實也の顔を覗き込んで居たが、だん／＼と彼女の瞳にも冷靜が溢れて來た。

「左様なら！」實也は呻吟くやうに言つた。

「左様なら！」ヨハンナは凛々しく言つて、一寸ボンネットに手をかけたが、髪のはつれをそのままに、玄關の方へ出て行つた。しかし實也はわざと彼女を見送らなかつた。

やがて自動車の走り去る音が窓の外に聞えた。彼はぐつたりとソファアの上に横になつて、深いため息を吐いた。

「かうしてはゐられない。」

言ひながら時計を見ると、もう八時過ぎであつた。で、玄關傍の室で勉強してゐた二人の書生を呼んでトランクに必要なものを一通り詰めさせて、火の用心や、手紙の轉送の事など叮嚀に命令して置いて、家を出たのは、十時前であつた。

彼は大きな苦しい戦ひを斬り抜けたやうな疲労と安堵とを覚えながら、電車で揺られて上野驛

に着いた時、入口に立つてゐて、「あ、入らしたワ。入らつしやつたワ！」と言つたのはヨハンナであつた。ヨハンナの後から見紛ふばかりに、すつきりした姿の奈々子が慎しやかに彼の方へ目禮した。

汽車の出るまでヨハンナは列車の窓際から、頻りに實也に話しかけたが、奈々子は少し離れた所に立つて、電燈に光る爪先のエナメルを見詰めたまゝ何にも言はないで黙つてゐた。

發車の合圖があつた時、奈々子は一二歩前に出て、媚を含んだ瞳で實也の方を眺めながら、心持首を傾けて無言の別かれを告げた。

「左様なら、御ゆつくり御静養なすつてゐらつしやいまし……」

ヨハンナは、はつきりさう言つて、一歩後に退いて車内を覗き込んだ。

實也は黙つて頭を下けた。そして双方の間が三間、五間と隔つた時、ヨハンナはハンカチーフを眼の前で振つてゐたが、奈々子はちつとこちらを見てゐるだけであつた。やがて白いハンカチーフも見えず、奈々子の優しい地藏肩を蔽うてゐる薄桃色の絹も見えなくなつたので、小さい溜

息を吐きながらクシヨンに身體を落した實也は、何とはなしに頭を抱えて俯向き込んでしまつた。

ヨハンナは詳しい事を言はなかつたが、自分に結婚の意志が十分であることを奈々子に傳へたに相違ない。僅に五時間前に訪問した時、病氣だと言つて會はなかつた奈々子が、急に自分を見送りに来るまでの心の徑路には、推察するに餘りある經緯があつたに相違ない。しかし、奈々子の顔は輝いてゐた。確に輝いてゐた。

そんな事を考へながら、ぢつと眼を閉ぢてゐると、いつの間にか、うとうとと眠くなつて來た。もう長い間眠らう眠らうと苦心しても、容易に眠られなかつた彼は、言ひ知れない快感に浸りながら、たうとう兩手を拱んだまゝぐつすり眠つてしまつた。

汽車が強く揺れたので、驚いて眼を覺すと、もう東の空がほんのりと紅らんでゐる。窓を開けて眺めると汽車は並木松に沿うた平野を走つてゐる。秋の朝の冴えた空氣の中に、あまり太くもあらぬ赤松が何十本となく、すんなりと聳えてゐるのも可愛い。松の間には沼らしい水溜りがある。汽車の響きに驚いた水禽が五六羽、羽音を立て、飛び立つ。もう燃えるやうな紅葉がさやさ



やと冷い風に揺ぶられてゐる。汽車は今、須賀川と鏡石の間を走つてゐるのである。

實也は生れ變つたやうな心持で洗面所へ行つた。そして元の席に歸つて車内を見渡したが、まだ乗客はみんな鼾聲を聞いて寝込んでゐる。彼は何故自分がこんなに、がたびし揺れる汽車の中で熟睡出来たかを考へてみた。

「遠ざかつてゐた幹二君との接近が眼の前に見えて來たからである……心の隅で愛すると公言出来なかつた奈々子に、結婚の意志を表示したためであらう……氣にかけてはならないと思ひながらも、やつぱり心の一部で氣にかけてゐた絹子が、志を決して洋行する事になつたと聞いたからであらう」

「これで、みんな行くべき路を行つてゐるんだ。」

彼はやつと安心したのである。歸朝以來の自分の心理を考へてみれば、怨んだり、諦めたり、迷つたり、女々しくも、子供らしくも、随分心を傷めたのであつた。

「これで善いんだ。これで善いんだ！」

彼は自分の前に見えて來つゝある運命の軌道を肯定した時、仄かな幸福が全身を包み嘯みつゝ

# 欠

# 欠

「どんな事情で？」

「つまりもう古いでございますワ。長らく日本に居なさるうちに、すっかり遅れてしまったのでございませう。」

いつのまにか二人の間には、會話の通路が開けて、今までの怪異な隔意が取除かれてゐた。

「あなたもドイツへ行らつしやるおつもりでせう？」

實也は足もとを用心して歩きながら問うた。

「えエ、ついこの間まで、そんな事を考へてゐましたが、今ではもう、そんな野心は捨てました。ひきました。」

「音楽をおやめになるといふ意味ではないのでせう。」

「歌つても弾いても駄目なんです。私のやうな平凡な女が、僅か三年や五年の練習で音楽家にならうなんて考へを起した事が、そもその大間違ひだつたのですワ。私もう一生ピアノには觸らないつもりなんです。」

絹子の聲は何となく興奮してゐた。

二人の姿は雑木林の中に見えたり隠れたりし乍ら、山の尾を下へ下へと降りて来た。そして、小さい祠の前の枯れかけた芝生の上に立停つた。

「實也さん、あなたはヨハンナさんにお會ひになりました？」

絹子はさう言ひながら注意深く彼の顔を見た。

「えエ、お目にかゝりました。」

「ヨハンナさんは今、どちらにゐらつしやいます？」

「絹子さん、あなたは、あの人達の事をちつとも知らないんですか。」

「えエ、ちつとも……」絹子の顔色は蒼ざめてゐた。

「ヨハンナさんは、あなた方とわかれて、ずつと幹二君と一緒に旅行を續けてゐたんですよ。」

「まあ、さうですか。そして今はどちらに？」

「さア、どこですかネ。何でも秩父長瀬にゐたんだが、議論をしたとか、喧嘩をして別れたんだとか言つてゐましたよ。」

「あの人たちは結婚するんでせう？」

絹子は聲の顫へを隠すために、わざと軽い咳拂ひをして、足もとの萎れた曼珠沙華を爪尖でそつと蹴つてみた。紅い長い花瓣が掉頭かぶりを振りながらゆらめいた。

「ヨハンナさんは、結婚なんて事には頓着しないでせう。一緒に旅行でもしてゐるうちが結婚中なので、口論でもして別れた時が、離縁ぢやありませんか。」

實也はこの次に絹子の口から出る質問が、奈々子の事であらうと豫期してゐた。

「實也さん、それは違ひますでせう。ヨハンナさんは、そんな浮氣なお方ぢやございませんワ。」

「さうでせうか。」

實也は芝生の上に蹲つて、落散つてゐる黄ばんだ柿の葉を一枚拾つて、それをいぢつてゐた。

「えエ、さうですとも、ヨハンナさんは偽悪者よ。あの方は最初からずつと一途に、幹二さんを愛してゐたんですワ。私はそれを極最近に知つたのです……」

「では正式に結婚するとおつしやるんですか。」

「正式に結婚するかしないか、そんな事は知りませんが、兎に角ヨハンナさんは唯一筋に幹二さんを愛してゐたんです。だから、私はヨハンナさんを尊敬してゐますのよ。」

「さうですか。」とだけ言つて、柿の葉を二つに引き裂いた實也は、絹子のその言葉が彼を裏切つて幹二と結婚した事の謝罪であると思つた。

「實也さん。今、奈々子さんはどうしてゐらつしやいます？」

果然！絹子の心に蟠つてゐた質問は吐き出されたのである。

「やつぱり、リオン商會を經營してゐます。」彼は其次に來る絹子の質問を恐れてゐた。

「しかし、もう店の方はおやめになりませう？」

絹子の言葉が何を意味してゐるのであるか、實也には解りすぎる程わかつてゐたが、わざと知らぬふりをして、「店を畳むんです？」と問うてみたが、絹子は苦笑したまゝ何にも言はなかつた。

眠られないまゝに一夜は明けたが、實也は浴室から歸つても、机に兩腕を衝いて空しく考へ込んでばかりゐた。

「多分絹子が訪ねて來るだらうといふ淡い希願に似たものが、心の表面に漂ふ。と、言つて絹子に會つてどうしようといふ深い考へがあるでもない。會はぬが善いといふ道義心に對つて、會つてみたいといふ淡い愛着が反抗するのである。

「總てのものは過ぎ去るんだ。」とは思つては見ても、やはり始めて大磯で會つた時の事が想ひ起される。異性に對して自分の童貞を捧げた対象である彼女の事は、忘れようとして忘られるものではない。

「御免下さい。」といふ女の聲が不意に廊下から聞えた。彼は驚いて「どなたです！」と言つて入口の方を見てゐると、襖が靜かに開いて顔だけ見せたのは、髪を櫛卷にした見知らぬ女であつた。

「旦那様、柿をお買ひ下さいませんか？」

人物と事件とに餘りの隔たりがあつたので、彼は張詰めた心が俄に弛んで、思はず苦笑しながら、「さうだなア、少しは買つてもいいが……」と言つて女の方へ顎を振つてみせた。

「御免下さい。」といつて女は入り口の所へ風呂敷包みを提げ込んで來た。

「よく賣れますか？」

彼は机を隔て、首を伸しながら言った。美しい柿の色が彼の前に現れた。

「えエ、おかけさまで……唯今青嶺閣にゐらつしやる東京のお客さまから、こちらへ行くやうに教へて戴きまして……」

女はそれ以上何にも言はずに、風呂敷の隅を引張つたり、柿を撫で、みたりしてゐた。彼は何だか物足り無さを感じた。

「五十錢ばかり置いて行らつしやい。」

言ひ乍ら彼は机の上にあつた財布から、五十錢銀貨一つを疊の上に投げた。

「有難うございます。」女は柿を疊の上に置いて、銀貨を押戴きながら出て行つた。彼は女の歸つたあとで、窓を開けてみたり、青嶺閣の二階の方を眺めたり、表通りをそとろ歩く女の姿に注意したりした。しかし何所にも絹子の姿は見えなかつた。

物見岩の絶壁が彼の眼に見えて来る。絶壁の遙か下を流れてゐる土色の濁川が見えて来る。彼の頭には願はざる不吉が見舞ふ。

欠

# 欠

「えエ、そんな筈はないと思ふんだけど……ちまいと起してみても下さいませ。」

絹子は腕くやうに、身體を起さうとした。

實也は靜かに蒲團を撥ねて、白い二つの手をとつたが、絹子は、

「駄目ですワ、實也さん、後から斯うして、抱いて起して下さいまし。」と云つて、甘へるやうに肩を揺すぶつた。

實也は無器用な手つきで、恐る恐る抱き起したが、

「苦しいワ、苦しいワ、やつぱり元の通りやすまして下さい。」と言つて、絹子は激しく荒んだ呼吸をした。

「では、靜かにお休みなさい。」

實也は湯槽ゆばねから取出した赤ん坊でも扱ふやうに、そうツと元の通りに寝かした。

「私、大へん寒いワ、どうしたんでせう。熱かつたり寒かつたりして……」  
がつくと齒を咬み合せた彼女の唇は紫色に見えた。

「もうやがて夜があけますから、夜が明けますと、おかみさんに頼んで、湯たんぽでも入れて貰

ひませう。』

實也は子供を賺すやうに言つたが、絹子の顔はけつそりと瘦せて見えるばかりか、眼の色がどんよりと濁つてさへるのが、氣味悪く思はれてならなかつた。

『私、もうみんな、あなたにお話致しましたワネ、詳しく……』

『えエ、承はりました。僕にはあなたのお心が、よく解つてゐます。』

『實也さん、私はそれが苦しいんです。私の言ふことが解つて下さることが、どれだけ私を苦しめることやら……私、やつぱりあなたにお目にかゝらないで、このまゝ死んでしまつた方がよかつたかも知れませんでした。何だか、あんな事をお話したのが、私にもあなたにも不幸を招いたやうに思はれますのよ。』

絹子はそれだけ言つて、また荒い呼吸をした。實也も何となく、絹子の言葉をうなづきたいやうに思つた。

夜明けを待ちかねて實也は、おかみさんに湯たんぽをこしらへてもらつた。絹子は時々、

『水を下さい、水を……』といふだけで、物を言ふだけの元氣もない。苦しいかと問へば、たゞ

うなづくだけである。

六時頃には、もう四十度近くの發熱だつたので、實也はおかみさんに頼んで、すぐ醫者を招びにやつてもらつた。

『四十度近い熱が出ましたか。それは肺炎ぢやあないか知ら、心臓が確であつて呉れれば大丈夫ですが……』

駈けつけて來た若い醫者は出迎へた實也の顔を見ながら、そんな事を言つた。『心臓』といふ一語を耳にした時、實也の胸は、どきん！と鐵槌で打たれたやうに思つた。

彼は若い醫者が狼狽しながら診察してゐるのを見てゐるうちに、何だか絹子は死ぬやうに思はれてならなかつた、で、彼は差つめ彼女と平生から一番親しくしてゐるヨハンナに電報を打つて來て貰はうかと思つた。しかし幹二と一緒にゐたヨハンナが此所へ來る事は絹子の精神をも病氣をも決してよい方へ導かないと思つた。そんなら奈々子に知らせようか……それもいけない。神戸の彼女の父に知らせようか。しかしそれは一度絹子の承諾を経なければならぬ。

などと思ひながら、重罪犯人が宣告を待つ時のやうに、びく／＼しながら醫者の言葉を待つて

るたが、醫者は診察を終つても黙つてゐた。絹子はぐつたりと疲れたやうに眼をとぢてゐる。

「一寸……」醫者は實也に眼配せして廊下へ出た。そして、「どうも急性肺炎らしいです。心臓が非常に弱いので、只今危険状態に入つてゐますが……」と言つて當惑さうな顔をした。

「さうですか、手當はどうすればいいんでございませう？」

實也は騒ぐ胸を強いて鎮めながら言つた。

「さうですネ、誰か他のお醫者に診て貰つては如何でせう？」

「さうですか、では此家のおかみさんと御相談いたしませう。」

實也は語調強く言つて、自分の室へ引返すと、絹子は苦しさに荒んだ呼吸をしながら、

「實也さん、實也さん、こゝにゐて下さいば。」

實也は絹子の枕もとに座つて、昨夜から際立つて瘦衰へた彼女の顔を見つめてゐると、睫が燒けつくやうに熱い。

そこへ主婦が氷嚢を取替へに来て呉れたので、醫者の言葉を耳打すると、

「あ、さうですか、では直ぐ神山先生をお迎へ致しますから。」と言つて出て行つた。

「實也さん、」と滅入るやうな聲で言つた絹子は、とぎれ／＼に、「私、起きてみたいんだけど、あなたと一緒に廊下までいゝから歩いてみたいんだけど。」

絹子は両手を前に出して、起きようとしたが起きられなかつた。

「どうしたんでせうネ。たつた一日二日で起きられなくなるなんて……」

「しばらく御辛抱なさい。熱が出なくなれば、すぐ歩かれるでせうから。」

話してゐる所へ、神山といふ醫者が診に来てくれた。

神山はもう四十過ぎた、でつぶりふとつた立派な體格で、黒い漆のやうな髻をなびかせながら、呻に診察した。そして何にも言はないで座を立つた。

實也は廊下まで送り出して行つて、

「どうでせう？」と訊いてみると、神山は頭を傾け乍ら、

「どうも元から心臓が強くないらしい所へ、發汗劑を服ませたらしいです。直言させて下さるなら二三日むづかしいですネ。」と言つて眼を赤い鼻緒の草履に落してゐた。



神山醫師が二度目に診に來た時、もうどうしても全快の見込がないから、知らすべき所へは知らせるやうに言ひ置いて歸つた。

實也はどうして善いか解らないので、すっかり混亂した頭をかゝえて、表座敷の廊下に立つてゐると、おかみさんは彼を勵まし宥めながら、

「旦那様、兎に角知らせる所へは知らせて置ませう。私、郵便局へ行つてまゐりますから。」と云つた。

「さうですネ、ではお願いいたしませうか。」

室に歸つた實也は、うつら／＼と眠りに落ちかけてゐる絹子に悟られないやうに、ヨハンナと奈々子と、ミセス・ベルトンとに同文電報を書いた。そして神戸の丸山家にあてゝ長文電報を書いた。

絹子の病氣は、素人目にも一時間一時間重くなるやうに見えた。

やむを得ない事ではあるが、絹子に何の相談もせず電報をうつたことが、罪惡のやうにも思は

れる。奈々子やヨハンナが、あの電報を読んだ時、彼女等の心の中に、どんな邪推と憶斷が渦巻くだらう。ことに神戸の丸山家では、發信人の名前を見てどんなに怪しみ驚くか知れないなど考へ續けて行くと、彼は何とかして此所を逃げ出したいやうにも思ふ。

「實也さん。」弱々しい聲で呼びかけた絹子は、氷囊を邪魔らしく眉をよせながら、實也の顔を意味ありげに見た。

「何ですか。」彼は彼女に自分の心を見透かされたやうに思ひながら問うた。

「何でもないの、私とあなたと……あなたと私つきりネ。私の一生の曆に……こんな日も一度巡つて來たことを、私は神様に感謝いたしますワ。あなたはもう赦して下さつたんですもの……神様もおゆるし下さいますワネ。」

絹子はさう言つて、凹んだ眼に一杯涙をためながら、につこり笑つた。

「絹子さん、僕も斯うした運命の巡り合せを豫期してはるませんでした。しかしネ……」

彼は言ひかけた言葉を、そこできつてしまった。

「しかしネ、それからどう？」

「しかしネ、僕はあなたが、御病氣だといふことを、神戸のお父さまへ知らせたのですよ。」

「神戸のお父さまに？」

「えエ。」

「お父さまは入らつしやるでせうか。」

「それは入らつしやいますでせう。」

「いゝワ、お父さまが入らつしやる前に、私、死んぢまつてゐるから……」

「……………」

「それから誰に？」

「ヨハンナさんにも……」

「ヨハンナさんは、よういらつしやらないでせう？ それから誰に？」

「ミセス・ベルトンにも……」  
「あの方もいらつしやいませんワきつと……それから？」

「奈々子さんにも……」

今度は絹子が黙つてしまつた。

「ヨハンナさんにお知らせしたんですから、奈々子さんにもお知らせしなければならぬと思つたので……」

實也は辯解するに言つたが絹子の眼には燃ゆるやうな妬みの輝きが閃いた。何だか言はうとして言ひ得ない齒痒さを満面ににじみ出させて呻吟いた。そして額に載つかつてゐた氷嚢を掴んで投げようと焦慮つたが彼女の手はたゞびく／＼と戦くだけであつた。

「奈々子さん、昨晩は如何でした？ 眠れて？」

ヨハンナはにこ／＼笑ひながら、ドアを静かに閉めた。

「眠れなかつたワヨ、いろんな事が氣になるんですもの。」

奈々子は耳たぶを紅らめながら段通の上に瞳を落した。

「さうでせう。私だつてまんじりと眠らないで、いろんな事を考へたのよ。」

ヨハンナは初々しく微笑を見せて椅子の側に立つてゐた。黒地に金糸花模様のシャルムーズの羽織が撫肩を迂り落さうに見える。小豆色に立框紋錦紗の袷が、唐草模様の朱錦の丸帯と一緒に眼立つて輝く。緋鹿の子の襦袢の袖が燃えるやうに袖口から覗いてゐる。

「どんなことを？」奈々子はヨハンナの珍しい和服姿に瞳を投げながら問うた。

「第一はあなたの事よ。すつかりきまつてしまつたのですもの。」

「だつて、まだどうなるか、未來の事はわからないぢやないの。」

「いゝえ、實也さんは随分お考へになつたんですもの。私、今朝絹子さんに手紙を差上げる序に、遠廻しに言つて置いたのよ。」

「まア、私のことを？」

奈々子は眼を圓くした。けれどもヨハンナは落着きすまして椅子に掛けながら、

「さうよ。明さまに知らせてはいけないと思つて、それとなく知らせてあげたの。それから幹二さんにも話してあげたワ！」

ヨハンナは難事を敢行した時のやうな表情をした。

「幹二さんは、もうお歸りになつたの？」

「停車場から歸つてみると、来てゐましたの。どこへ行つて來たかつて問ふんですもの。私、すつかり話してしまつたの。」

奈々子は何と云つていゝかわからないので、黙つてゐた。

「幹二さんも随分苦しんでゐらしたのよ。だけどネ、こんなに解決がついてしまへば、もう考へる必要も苦しむ必要もありませんからネ。」

ヨハンナは奈々子の顔色を差覗くやうにした。その時奈々子は何となき無氣味さを感じたので、思ひきつて、

「では、あなた方も御結婚なさいますの？」と問うてみた。

「いゝえ、私たちは……まだそんなことまで可なり時間がございますワ。」

「どうして？」

「あなたが御結婚なすつて、絹子さんが御洋行なすつて、それから後の事ですワ。」

ヨハンナは自分の言葉が、あまり露骨であつたのをごまかすやうに、右の手の甲を口に押當て

て強いて作り笑ひをみせた。

「絹子さんは唯今、どちらにゐらつしやいます？」

「やつぱり磯部でせう。私磯部の方へ手紙を出して置いたの。」

「ミセス・ベルトンも御一緒にせうか。」

「いえ、ミセス・ベルトンは湯河原にゐます。私、これからお訪ねしようと思つてゐるの。この間來られたドイツのデエメル教授ネ、あの人と衝突して大變悲觀してゐらつしやるときゝましたので、行つて慰めてあげたいと思ふのよ。」

「どんな衝突をしたの？」

「デエメル教授は、ミセス・ベルトンの音楽を滅茶々にけなしつけたんでせう。」

「それでミセス・ベルトンはどうなすつたの？」

「あんな人ですから、お家を飛び出して湯河原にゐらつしやるのよ。お一人で、話してゐるうちに奈々子の心はいつしか平靜になつてゐた。」

「私、日本娘になつて、ミセス・ベルトンに此のキモノを見せてあげるのよ。いゝでせう此のま

ゝで……」

ヨハンナは立上つて、くるりと後向きになつて、新調の着物を奈々子に見せた。

ヨハンナが出て行つたあとで、奈々子の心は急に言ひ知れない淋しさに囚はれてしまつた。

椅子に凭れて窓の外をほんやりと眺めてゐた彼女は、起ち上つて出窓の所へ行つてみると、其所に吊してある蟲籠の中では、此の間まで太陽の光りのもとに、まだ時々戀を囁やいてゐた邯鄲が、露草の葉蔭で長い觸覺を底板につけて、細い六本の脚を揃えて、伏拜むやうな恰好をしてゐるのを見た時、涙ぐましい思ひが胸一杯になつた。

歌つても、歌つても、一聲の應へを聞かないで、この籠の中で歌ひ疲れて死んだのかと思ふと、むごたらしい事をしたやうにも思はれる。けれども奈々子はこの哀れな邯鄲が、自分のシンボルであるとしても、別に悲しむには及ばないといふやうな感じが、心の奥底から湧く。

彼女の前には結婚といふ歡樂の盛宴が張られようとしてゐる。しかし、どうしたものか彼女の心はその前奏樂に浮き立たないばかりか、形容し難い沈鬱が心の中に漂ひはびこる。自分はこの邯鄲のやうに、たゞひとりで戀に泣き暮して死んだ方がよかつたのではないかといふやうな考へ

が、心の片隅から萌す。

結婚は戀の夕暮だとヨハンナはいつも言つてゐた。しかしヨハンナは絶えず戀を續けてゐる。勇敢に續けてゐる。それがためには思ひ切つた策略をも弄する、反間の計をもめぐらす。けれども戀を得た曉には、もうそこに大きな不安が待つてゐるらしい。

奈々子はヨハンナが、日本娘になつてミセス・ベルトンを訪問する心根を知つてゐる。ミセス・ベルトンが夫婦別れをして、唯ひとり湯河原にゐるときいて、そこへ出かけて行つた理由をもう過ぎる程知つてゐる。彼女はヨハンナが、まだ最後の激戦を戦ひつゝあるのだと思つた。

「さうしてまで奮闘を續けて、そして幹二さんと結婚したところで、果して楽しい生活が續けられるものか知ら？」

それは奈々子の身にとつては大きな疑問であつた。結婚は戀の夕暮だと知つてゐるヨハンナは、いつまでも戀の戦ひを戦つて、それを楽しみに生きて行かうとするのかも知れない。しかし自分にはそんな勇氣がない。精々自分は、戀を歌ひ戀を泣くだけでどこまでも實也の上に競ひかかる戀の敵を逐ひ拂ひ追ひ斥けて行くやうな勇猛心はない。と、言つて結婚してしまへば、もう

それで萬事が終局だと誰が言へよう？

自分は絶えず實也を愛してゐたが、實也はかつて絹子に走つた。絹子は實也を愛してゐたが、幹二に走つた。幹二は絹子と結婚したが、今はもうヨハンナと夫婦同様にしてゐる。しかし、それもやがて破綻が來さうである。

「結婚！ それは果して人間に幸福を與へるものだらうか。」

もう廿六の春を迎へようとしてゐる奈々子の心は、無やみに快樂の夢に酔ふことが出來ない。振返つて過去の自分を顧みると、唯一途に實也にのみ愛を捧げて、他を顧みなかつたこと、泣き苦しむ悶えて來た自分は尊いものだと思はれる。けれども一度絹子を愛した實也、そして絹子に裏切られた實也。ひどく心を傷つけられた實也が、自分と結婚することに依つて全然絹子を忘れ得るものであらうか、嘗て結ばれた二人の間の感情が、二度と燃えないものであらうかといふ疑問が、むら／＼と湧き起る。

「私はやつぱり、この邯鄲のやうに、ひとり泣いて、ひとりで死ぬのがよかつたのかも知れな

奈々子の心は、斯うした淋しさに戦<sup>お</sup>く。そして涙ぐむ。けれども忽ちに、火のやうな戀しさが全身を包む。今から直ぐ實也の居る所へ走つて行きたいやうにも思ふ。

結婚後の杞憂が漲れば漲るほど、その反面に實也を慕ふ情がいや増しに増して来る。

奈々子は淋しがつたり、焦々したり、悲觀してみたり憧憬してみたりしてゐるうちに、どうしても一度實也に會つて、心を打あけて話してみなければ解決がつかないやうな氣がするので、あとを追つて青根まで行つてみようと思つた事も幾度であつたのかも知れない。けれどもそんな事をして輕蔑を招いてはと思つたので、平生から愛讀してゐた詩集の中から、

界に

深い大きな河を掘つた

二人の王子

見渡しても何にもない

遠いかなたに木の橋が一つ

二人の王子は大のなかよし

そのツケ御存知？

深い大きな河があつたから

遠いかなたに木の橋ばかりがあつたから

といふベルハレンの詩を一つだけ書いて送つて置いた。そして毎日のやうに、今日か今夜かと實也のたよりを待ちに待つてゐるが、返事は五日たつても七日たつても来ない。さうしてゐるうちに自分の心が段々と怨みねじけて行くのを自覺する。

「私は、ヨハンナさんに調戲はれたのかも知れない！」

そんな事を思ふと、もう居ても起つてもたまらなくなる。で、直ぐにも出立の支度をしたいと思ふがいざといふ場合になると、けつそり弱り込んでしまふ。諏訪に行つた時の事、木曾福島に行つた時の事が憶ひ出される。そして、「私は何といふ舊式な駄目な女だらう？」と自分で自分を嘲りたくなる。何といふ解決力の足りない自分だらうと思へば、棒ちぎれで自分と自分の頭を裂ける程打つて打据えてやりたくも思ふ。

奈々子は今日も、朝からそんな事ばかり考へてゐた。露草が枯れて、死んだ邯鄲の羽がほろり

と落ちてゐる蟲籠は、そのままに出窓に吊されてゐる。

「全體私は何をしてゐるんだらう？ 私は今戀をしてゐるのか。愛に悩んでゐるのか。疑つてゐるのか。戀を恐れてゐるのか。結婚を避けたいのか。それとも早く結婚したいのか。」

そんな問題が亂雲のやうに頭の中に一時に湧いて来る。そして解決がつかないで悶える。頭がはち切れさうである。こんな時に實也が死んだなら、自分も一緒に死ぬかも知れないと思ふ。昔の人が黒髪を剃りこほつて尼になつた動機とその決斷が、うなづかれるやうにも思ふ。

フラスコの水をグラスに注いで、ぐつと一口飲んで太息をついた時「奈々子さん！」と言つた聲が彼女の耳を貫いた。それは確かにヨハンナの聲であつた。しかも周章と憤怒とを含んだ聲であつた。

「ヨハンナさん？ 入らつしやいな。」

彼女はドアの方を振向きながら、グラスを机の上に措いた。

「御免なさいナ。」と言つて入つて來たヨハンナの眼は、果して怒りに輝いてゐた。

「まア、ヨハンナさん、どうかなすつたの？」

奈々子は心配さうにヨハンナの顔を覗き込んだ。

「私、幹二さんと、ひどく議論をしたの。」

「さう？ どんな事で？」

「幹二さんはドイツへ行らつしやるんだつて。」

「いつから……」

「もう直ぐでせう。經濟研究會の囑託で三年ばかり留學なさるんですつて。」

「お目出たいぢやないの？ あなたも御一緒に？」

奈々子の言葉の終らないうちにヨハンナは強く右の手をふつて、

「いゝえ、私はもう幹二さんと別れてしまひました。あんな人の事……考へるのもいやです！」  
と言つて白い前歯をきり／＼と咬み鳴らした。

「お別かれになつたのですつて。」奈々子は眼を圓くした。

「えエ、六年間探してゐたものは寶石ではなくつて、瓦の破片かけらだつたのです。瓦のかけらを投捨

てるに何の躊躇もありません。』

ヨハンナは憤怒に燃えた顔に、物凄く微笑を見せた。

「此間お伺ひした晩でした。幹二さんは以前から交渉を受けてゐた研究会からの留學の件を、承諾してしまつたのです。私、大變反對したんだけど……」

ヨハンナは椅子に身體を落しながら、太息を吐いた。

「いゝぢやないの、ドイツへ行らしても……」

奈々子は不審しさにヨハンナの顔を覗き込んだ。

「奈々子さん、」と言つて一寸躊躇したヨハンナは、苦しうな表情をして、「あなたは、幹二さんが急に日本をいやになつた理由がお察しになれませう？」

或はさうではないかと思つてゐた矢先へ、正面からそんな質問をせられた奈々子は、この場合自分をごまかすより外に途はない。

「さア、どういふんでせうか私には解りませんワ。」

「では、すつかり申上げますから、怒らないで聞き下さい。私ネ、幹二さんが長瀬からお歸り

になつた翌日、私があなたと實也さんの仲に立つて、あんなお取持をしたといふことを話しましたら、幹二さんはすつかり怒つてしまつたのです。あなたが御結婚なさると聞いた幹二さんは、其のまゝぶいと私の家を出て行つたきり、三日たつても五日たつても歸つて來ないんでせう。私、幹二さんのお心がよくく解つてゐますから、會つてゆつくり話して、宥めてみたいと思つたので、あちらこちらと、心當りを必死になつて尋ねたんです。すると呆れるぢやありませんか、ミセス・ベルトンと二人で湯河原へ行つてゐるんです。私、こんな質ですから、そこへ乗込んで行つたの。そして一悶着起したのよ。」

ヨハンナは心の中から、或痛快さを喚起したやうに微かな笑ひを見せた。

「幹二さんはミセス・ベルトンとお二人で居らしたの？」

「えエ、ドイツへ行くので、便宜を計つて貰ふために尋ねて來たのだつて……幹二さんはそんな事を言つてゐましたが、私、腹が立つたから、男妾だつて罵つてやつたの。それからネ、こんなことも言つてやつたのよ。あなたはお金のために絹子さんと結婚したのだつて。夫りやあ本當よ。絹子さんがお父様から三十萬圓四十萬圓貰つて來て、幹二さんを新聞社の社長にでもしあけ



て御らん。今頃は絹子さんの靴を載いて足の裏にキスでもしてゐるんだワ。處がさううまく行かなかつたので、あなたに結婚を申込まうとして、絹子さんを離縁なすつたのよ。私、よく知つてゐたワ。あの時狂人のやうになつて輕井澤へ來たんですもの……けれども私は、あなたと實也さんとを近附けてあげたいために、幹二さんを私の方へ引張つて置いたのよ。そしてあなた方の約束が纏まつたので、私、そのことを幹二さんにお話すると、案の定幹二さんはぶいと私の家を出なすつたの。そして、ついこの間御亭主をほつほり出したミス・ベルトンに近づいて行つたんですワ。留學といへば立派だが、ミス・ベルトンの男妾になつて、おしまひには棄てるか棄てられるかして、泣くか泣かれるかの終末になるんでせう。屹度……」

ヨハンナはさう言つて、汚れでもふるひ落すかのやうに、ぶるぶると肩を揺ぶつた。奈々子は俯向いて、黙つて彼女の話を読みかいてゐたが、テーブル掛の模様を指尖で繪取りながら、

「しかし、ヨハンナさん。あなたは今まで、幹二さんをすつと一筋に愛してゐらしたんでせう。私はあなたのお心を能く存じてゐますワ。本當によく存じてゐますワ。」と言つて、靜に瞳を擧げた。

黙つて下唇を咬みながら、奈々子の指尖を見てゐたヨハンナの眼には涙が溢れて、白い頬を細い銀線のやうに、傳つて流れはじめた。

「えエ、私はすつと唯一筋に幹二さんを愛してゐました。幹二さんがまだ卒業なさらない前から私は愛の道を眞直ぐに走つてゐました。」といつたヨハンナは、涙にぬれた眼をしばたゝいた。

「それだのあなたは、幹二さんが御結婚なすつた時でも、あんなに平氣でゐらつしやいましたのネ。」

奈々子は初戀の實也が嘗て絹子の懷に走つたときいた時の苦痛を想ひ起しながら、ヨハンナの顔色を窺ふやうにした。

「私の事だから外面は平氣でしたが、やつぱり内心は張裂ける程苦しかつたのヨ。けれども、私は斯んなに考へてゐたの。戀愛といふものは、並んで大道を歩いてゐるやうなものだつて……たとへば私と幹二さんと……あなたと實也さんと……戀愛といふ広い大道を肩を並べて歩いてゐるのです。戀愛の大道を歩き疲れて一夜の宿を求め。そこが結婚といふ關所なんです。」

ヨハンナはさう言つて、賢しこさうな瞳を輝かした。奈々子は深い暗示でも與へられたやうに、

「あなたのいつも仰しやる戀の夕ぐれですネ。」と言つて、教を乞ふやうな態度をした。

「私は今までさうばかり思つてゐました。女は一本調子だから、戀愛の大道を傍眼わきまもふらずに歩きます。けれども男は時々女から離れて姿を隠します。其時私は男の後を追ひませんでした。男は氣が多いんだから、景色の佳ささうな小高い所に駈け登つたり、清い流れに足を浸してみたり、美しい濱邊を駈けてみたりするだけで、やつぱり私の歩いてゐる一筋路へ戻つて來るのだと思つてゐました。だから私は幹二さんが絹子さんと結婚しようと、あなたに心を傾けようと、結局私の所へ還つて來るものと信じてゐたのです。けれども私達の行手には、不意に大きな岐路かみちが見えました。そして私達は永久に會ふことの出來ない方向へ……右と左とに分れくになつてしまつたのです。つまり私達には戀の夕暮が來なかつたのです。私は永久に淋しい白路をとほくと歩かなければならなくなつたのです。私は私の過去を振り返つてみて、幹二さんがわき路へそれて行つた時も、必ず最後には私の所に歸つて來られるとばかり、信じ切つてゐた自分の姿を不便に思ひます。六年間の長い旅路……それが全く無駄な歩みだつたと思ふと、自分を信じ過ぎてゐた私自身を嘲りたくなります。奈々子さん、嗚呼せきこがましい話ですが、私の今まで考へてゐた戀愛

に關する哲學は、すっかり變つてしまひましたのよ。私、今朝から幹二さんと、随分ひどい事を言ひ合つたの。男つてものは、やつぱり駄目ネ。あなただつて實也さんを信じ過ぎてはいけななことよ。私、さう思ふワヨ、本當に！」

彼女はいつしか昔の議論好きなヨハンナに立返つて、活々した顔付で更に言葉を續けた。

「奈々子さん、本當にさうよ。私もうすつかり男といふものを見くびつてしまつたの。私、いつだつたか讀んだ書物の中に、こんな事を書いてあつたのを覚えてゐるワヨ。女は十五歳から四十七歳まで三十二年間、毎年双兒たごを産むとしても六十四人しか産めない。けれども男は、十七歳から七十歳まで五十三年間一萬九千三百四十五日に、一萬九千三百四十五人の子を産ませ得る可能性があるつて、私、その時は物數奇なことを勘定したものだとはかり思つてゐましたが、今になつてそれが、ある眞理を吾々女性に教へるものだとなりましたワ。吾々は男といふものをこんなに動物學的に見なければいけない事よ。ね、奈々子さん。」

ヨハンナは眼を圓くして、作り笑ひをした。

「だつて、人間は節制も修養も出來るんですから……」

奈々子はヨハンナの説を輕蔑したいやうな表情をした。

「節制とか修養とか、そりやあそんな言葉もありますワ。だけど駄目よ。そんなこと。」

ヨハンナは齒痒さうにハンカチーフの端を掴んで強く振つた。

「人間を動物として見れば、さうかも知れませんが、節制とか修養とかを積んで、今日の一夫一婦の制度まで進化して來たんぢやありませんか。」

奈々子も負けてはゐなかつた。ヨハンナはハンカチーフを強く指に捲きつけながら、

「奈々子さん、私の家の庭に小さい柿の木があつたのよ。それがネ何とかした拍子に庭掃爺さんに根の所から折られてしまつたの。そしたらネ何だか知らないが柿に似た變な木が芽を出して、半年に一間ばかりも高くなつたワヨ。」

「それがどうしたと仰しやるんです？」

「私ネ、ヘンリー・ヴァンダイクの書いたスパイロツクを讀んだ時、面白い話があつたのを覺えてゐますワ。それは斯うなの。宗教だの道德だのといふものは、接木をするやうなものだつて……接木が工合よく成長してゐる間は、蜜柑も生り柿も實ります。けれどもその幹が風に吹折られ

てごらん。根元から枳殻の枝が伸び正體の知れない芽が出るといふんです。人間だつてさうよ。

みんな接木をしてるのさ。幹二さんなどは接木が早く枯れて、台木ばかりが成長したんだワ。全體の男つてものは、大抵がやくざな台木ばかりぢやあないの？」

「それはひどいワ。私はそんな風に男を見たくはありません。」

奈々子は捨鉢になつてゐるヨハンナを説服せようとした。

「それはさうでせうとも、私はあなたに實也さんをお捨てなさいとも、實也さんをそんな多情なお方だとも斷言はいたしませんけれど……しかし實也さんだつて男ですものやくざな台木からやくざな芽が出ないとは言へないでせう。」

ヨハンナは兩の手でハンカチーフを引伸ばして、それを膝の上に載せて、綠色したフランス刺繡を見詰めてゐた。

「私だつて實也さんを聖人だとは思つてゐません。そりやあ人間ですもの……」

「さうでせう！」と言つたヨハンナは凱歌をあけたいやうに瞳を輝かした。「現に實也さんだつてあなたを捨て、絹子さんに走つたぢやありませんか。男ですもの、外國にゐらつしやるうち

に、どんな所で、どんな事をしたか知れたものぢやありませんワヨ。」

ヨハンナは奈々子の心をえぐるやうに言つて、ぢつとその顔色を見つめてゐた。「けれども、實也さんは、やつぱり私の所へ歸つていらしたぢやありませんか。」

「そりやお人が善すぎますソヨ、奈々子さん。私はもうそんな事は信じません。實也さんは、私の意見を入れてあなたと御結婚なさる約束をなさいました。近いうちに御結婚なさるでせう。しかしネ、奈々子さん。あの晩私は實也さんから……私、驚いてしまひましたワ。そりやお男の常で、出来心といふものでせうけれど……」

ヨハンナは奥歯に物の挟まつたやうな物の言ひ方をした。

「では、實也さんに誠實が無いと仰しやるの？」

奈々子は容易ならぬ事を耳にしたと思つたのである。

「奈々子さん、私は急に責任を感じて來たのです。私、もつとく打あけて申上げなければならぬのよ。」

ヨハンナは俄に緊張した態度を示した。

「絹子さんは、ミセス・ベルトンと一緒に洋行なさる。あなたは實也さんと結婚なさる。私は幹二さんと同棲する。三方それでうまくおさまつたと思つたのは、私の淺薄な考へでした。それはみんな私の仕組んだから、くりでした。所がそのから、くりの錢卷せんまきが一つ狂ふと、みんな巡々に狂つてしまふんです。ミセス・ベルトンが幹二さんと手に手を取つてドイツへ行くとすれば、絹子さんは日本に留まるにきまつてゐますワネ。さうすると絹子さんは、も一度實也さんに還つて行らつしやるかも知れませんワ。」

ヨハンナは自分の言葉が大膽すぎるのを躊躇して、一寸言葉をきつたが、さらに勇氣を出して、  
「奈々子さん、私、本當にそんなことを考へてゐるのよ。」と斷言した。

「私、實也さんを、そんなお方だとは思ひませんワ。」

奈々子は彼女の言葉を否定しようとした。

「だつて、京都時代から、あれだけあなたを愛してゐながら、あなたを捨て、絹子さんに走つた過去があるぢやありませんか。」

ヨハンナは白眼にして詰るやうに言つた。